ふる里の街道の歴史と民俗

増田忠美

はじめに

かつて私たちは国家のため、天皇陛下のため、あるいは大東亜共栄のためと、戦争へ戦争へと一銭五厘でかり出された。私もまたその一員として、南支広東方面、香港、スマトラ、ガダルカナル島へと、昭和十四年から昭和二十一年まで、途中に一回も帰ることができず戦いに明け暮れたのでした。

その結果他国を破壊し、罪もない人々を殺し傷つけ、そして自国をも破滅のふちに追いやったのでした。このような人間のおろかさに対して、これを真に防衛するために、人間の様々な過去の生きざま、虚像でない歴史の実体を明らかにし、そのデーターに基づいて、再び過ちを犯さないようにすることこそ大切だと思います。

私は若い時もっと学びたかった。そして失なわれた青春を取り戻すためにも、また次の世代の人たちに、無力ではあるが戦争体験とか、過去の歴史、すなわち過去のデーターとかを語り継ぎ、次の世代の人たちによりよく生きて頂きたいものだと思うのです。

私たちの若い頃は、日本人は単一の民族であり、日本列島の中で独自の文化を築きあげた。そして天皇は神代かられんめんとして続き、これが日本の歴史であり国体であると、観念させられ教えられてきた。

しかし、日本人は果してそんなスケールの小さいものだったのか。いや違う、日本人の体質はもっと規模雄大であり、古代オリエント、そして、東アジア大陸の中で、各民族と様々なつながりを持ち、アジア的規模の中で形成されたが、後に日本列島の中で凝縮され、最終的に徳川三百年の鎖国の中で、島国根性が培われたのだと思います。

私はこの思いを解明するため、これからの人生を自分なりに納得するため追求して行きたい。そして、そのための同志と、共に求め学んで行こうと思います。

日本民族の解明は、少くとも奈良、平安時代以前にさかのぼらなくてはならないし、文献のみでは解決しない。考古学、民俗学、人類学、其の他様々なものから、集成されていかなければならないと思います。

さて、それはそれとして、今回の「ふる里の街道の歴史と民俗」は、先にのべた最終目的に対して、地に着いた地域のことをこつこつと調べ、手掛かりとすることこそ重要であるための一端であり、私のような、最近まで歴史についてづぶの素人が、様々なものから学び、そして学んでいる足跡として拙い二文を書いているとお考え頂きたいと思います。今回の学び方も、これから先数年かかるものの一端をのせて頂いたものですから、未完成品であることをあらかじめおわび致します。また今回は近世編ではありますが、街道の前時代の概要を前文とし、街道の案内を骨組にして、あまり取り入れることができませんでしたが、途中にある遺跡、遺物の調査概要とか、街道沿いの歴史、伝承、旅のエピソードなどを充足、補訂していきたいと思います。

近世に入る前の交通体制のあらまし

【東海道の名称とその起り】

東海道という言葉が歴史の上に登場してくるのは、崇神天皇の十年（西暦前八八年）九月、四道将軍を全国に派遣した記事の中に、「東海（ウミツ）」とあるのが初見とされております。しかしながら、このことは東海道すなわちヤマノミチに対する、海に沿った道としてのウミツミチということであり、ヤマトからアズマへ通ずる道、及政治的領域の国々をも意味したものと思われ

ます。現在考えられる江戸時代の東海道は同一のものとは異なるものと考えるのが正しいと思います。

歴史は下って大化の改新の翌年、同二年（六四六年）道路行政（駅制）の一つとして、街道に駅を置き、駅馬、伝馬（ツタエウマ）の制を設けたとされていますが、むしろ白雉年間（六五二年）以後ではないかと思われます。駅制については、古事記や日本書記に駅、駅路、駅使、駅馬などの語句が見られますが、なかなか確証するには至りませんでした。しかし大宝律令（七〇一年）以前においても、伊場遺跡の木簡にある「駅評人」の「評」つまり郡より前に使われたものが出土したことにより、律令以前の道路行政単位「駅評」があったことが証明されました。

【律令制下による古代交通制度】

この交通制度の構造や特徴をのべますと、まず律令国家の支配体制を確保したり、行政を速やかに取り行うため、政治支配に必要な人と物の移動、情報、国家の大事、政令の伝達その他を、馬を手段として施行した。特に重要なことは、緊急非常の場合の駅家制（はゆま）と、通常平時の交通手段としての伝馬制（つたわりうま）との二重構造であった。したがって人力によった調庸（物納の税金）の運送などは、その利用から排除されていた。以下八世紀頃の交通のしくみについて説明しますと、京都を中心として、全国の諸道を次の三種に大別しました。

大路……山陽道
中路……東海道、東山道
小路……その他の四道

また、等級により、駅馬の数は大路に二十疋、中路に十疋、小路に五疋と定められた。このことは、交通の量によって区分されたもので、これらの道路は原則として、三十里（約十六キロ毎に駅（駅家）をおき、駅員（駅戸）が配属され、それらを駅長が統轄した。この駅家の制度は非常の時に限られ、これを利用した朝集使、駅使、国司には駅鈴が発行されたが、保管、発行は厳重を極めたという。そしてこの利用は緊急な重要事に限られたため、あまり利用されなかったと思われる。これに対し常の官人、物資の移動や、情報の伝達などは、大半がこれによったと思われる。伝馬は道路の等級、郡の規模にかかわりなく、郡家毎に五匹と定められ、富裕な駅戸に飼養させ、駅員（課丁）の雑役を免除した。最近はっきりしてきたことは、郡家（郡衙）が同時に旅宿（旅舎）と兼ねていたことである。

以上、八世紀における交通制度の駅家、伝馬について略述しましたが、要約すると駅家（はゆまの早馬の意）制度は、非常に備え最短距離で目的地に到着することに意味があり、伝馬（つたわりうま）は、各郡の郡家を通常ルートに目的地に達するということで、そのためには両者の交通ルートがしばしば異なる場合があることが、駿遠両国の交通制度の中にも見られます。

【律令的交通制度の変容と宿の形成】

郡家に付属した駅馬制を通常の交通制度とし、駅家制を非常に備えた交通体系とした律令制下の二重構造交通行政は、時代の推移と共に変容を迫られるようになった。その原因の一つは、伝馬に対して負担が過重となったためである。伝馬の利用は時代が進むに従い、駅馬の数倍になったと推定され、しかも、伝馬の数は小路の駅馬と同数であったから、当然需要に応じきれなくなり、九世紀以降の政情の変化、郡制の動揺と両面から伝馬制は衰退を余儀なくされたものと思われる。これに伴い、駅家に対する需要が増大するのは当然であるが、しかし駅制自体、東海道の交通量の増大が進むに従い、交通体系全体が時代の進展とともに、対応を求められてきたのではないかと思います。その具体的兆候として、官営的駅伝制とは本質的に異なる、地方の長者による私的な宿泊施設である。「宿」の発生である。宿は旅行者の宿泊施設と共に、慰安を目的とした遊女の存在で

あります。

駿遠両国の宿としては、平安末期頃から鎌倉時代にかけて、橋本宿、池田宿、手越宿、黄瀬川宿などが有名です。其の他、時代的要求として、反権力者とか、盗賊とかが、地方に、特に阪東に横行しはじめると、それに備えて相模国の足柄関や、駿河国の横走関、清見関などが置かれるようになりました。

また東海道の交通に対し渡河設備の状況はどうなっていたでしょうか。次にそれに対する古い文献の内主なものを見ますと、

承和二年（八三五年）六月、東海、東山両道に、浮橋および布施屋を造り、水駅には渡船を置いた。この時、富士川に浮橋を造り、大井川には渡船二隻を増設し四隻とした。（三代格）

仁寿三年（八五三年）十月遠江国の廣瀬川（天竜川）に郵船二隻を増加した。（文徳実録）

貞観四年（八六二年）この年浜名橋を修造した。（三代実録）

元慶八年（八八四年）九月、正税稲一二、六四〇束をもって浜名橋を改修した。橋の長さ五十六丈、広さ一丈三尺、高さ一丈六尺（三代実録）

【中世の東海道】

鎌倉幕府の成立により、京都、鎌倉、常陸に至る道として、東海道は国内随一の幹線道路となった。その理由は、政治、経済、文化の発展のみならず、軍事道路としての役割も画期的に重要となり、また官用としての交通以外に、私的に交通する人々が多くなったのである。特に平安後期以降より中世に入って旅泊とか、交通の仕事を主要な機能とする宿は、街道の各地に形成されて賑わいを見せ、その中で中赤初期に名を知られるものとして、橋本、引間、池田、見付、懸川、菊川、島田、岡部、手越、興津、蒲原、車返、黄瀬川、藍沢、などの諸宿がある。

国府は、見付（遠江）、府中（駿河）、三島（伊豆）、であり、商業の拠点としては阿部市をはじめとして、引馬、藤枝、前島などの市が名を知られていた。

また渡場としては、池田（天竜川）、島田（大井川）、手越（安倍川）、吉原（富士川）などが見え、海上交通の場としては、江尻、新井、懸塚などが名を知られている。

戦国期に入ると、戦国大名は領国支配のため独自に、交通、伝馬に関する制度を定め、道路網の整備に力を注ぐ一方で、交通業務に従事する問屋、伝馬衆などの保護を行った。また河川の渡渉業務に従事した船守などにも特典をあたえ、軍事、経済の流通の掌握に腐心したのだった。

人間の往来、物資の輸送、文化の伝播など、人間社会の発展の主要な動因となる交通道路は、ある時期には除々に、ある時期には急速に、時代に即応して整備される。

中世末戦国期は、戦国大名の領国支配と戦略目的のため、急速に交通網が促進された時期と思われる。しかし一方その整備は、領国規模にとどまり、閉鎖的なものであり分権的であった。これを全国的規模に拡大する素地をつくったのは、統一政権を目指した織田信長であった。

「信長記」に見ると、「天正三年正月（一五七五年）東海、東山両道の大路、道、橋を造らしむ。海道は広さ三間半ありて大道は三間、その道の曲りたる所を直につけ、その両辺に松柳を植えしむ。同年修理成就す。」とある。

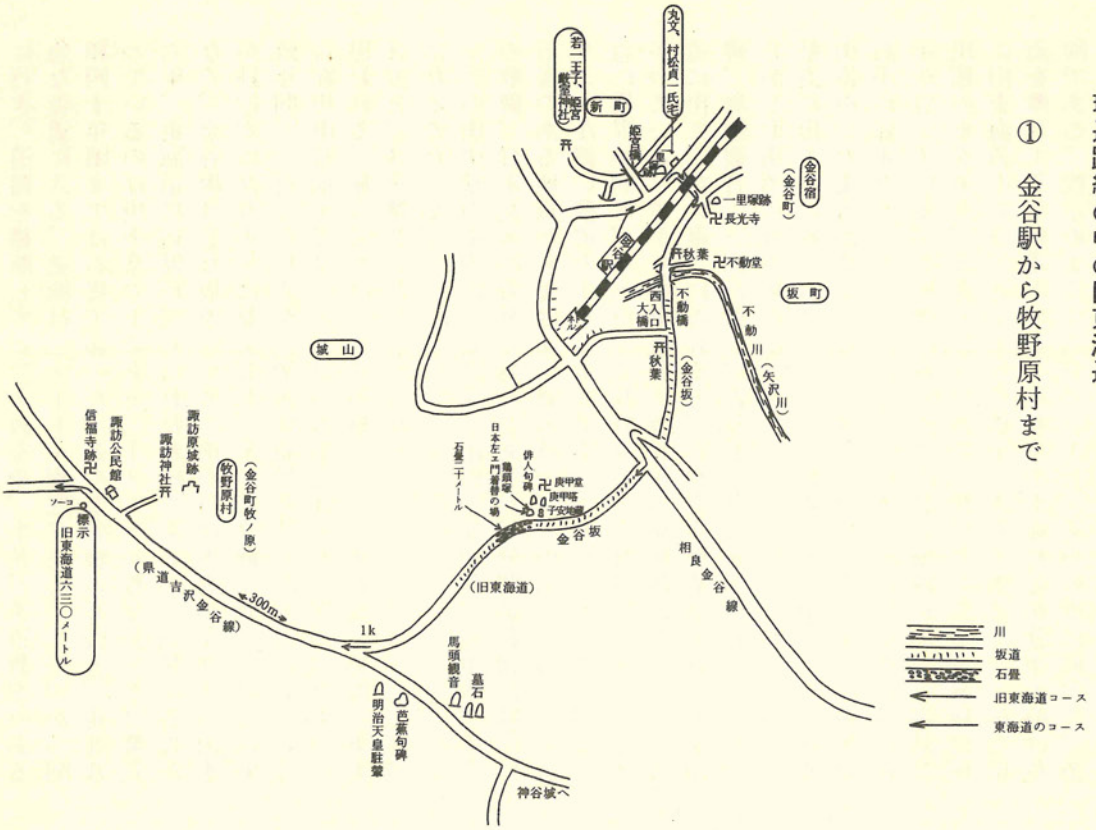
織田信長はまた、関所の撤廃、従来の六町一里の制を改めて、三十六町を一里として一里塚を築かせたといわれる。

豊臣秀吉は、この政策を継承して、天正十九年（一五九一年）家臣長束正家を奉行として、海道を整備したことが文献に見える。

かくして一層統一政権の確立した徳川幕藩体制の近世へと、時代は進み、東海道は五街道の一つとして、従来の分権的、領国的な支配から脱して、一元的に掌握されることとなったのである。

現道路網の中の旧東海道

① 金谷駅から牧野原村まで



【現道路網の中の旧東海道案内】

――国鉄金谷駅から牧野原へ――

東海道本線金谷駅を下車して、駅前の通りを右手（東）に取ると、左側に巌室神社（旧若一王子、姫宮神社）に通ずる参道がある。参道に入るとすぐ矢沢川があり、その上にかかる橋を姫宮橋という。この神社は金谷本宿の氏神で、八雲神社（牛頭天皇社）が河原町の氏神である。境内には稲荷神社もある。幡のある細い石段を登ると、巨岩の下に社殿があった。神社名が変ったことは気にいらなかったが、その理由は理解できたような気持ちだった。

参道の前を通り七、八軒行った所に、一里塚や、金谷宿の高札場があったといわれる茶商丸文村松貞一氏宅が左側にある。おそらく、古くは若一王子、姫宮神社の参道入口が今より少し違っていて、この丸文宅の地内あたりに、高札や、一里塚があり、神社入口を北側に見、その先長光寺の参道を南側に見たものと推定される。

旧東海道の西へ向う道は、この丸文宅の前の国鉄ガードをくぐり、日蓮宗長光寺の門前を右に折れて西進し、桜井歯科医院の先の現不動橋に出る道がそれである。この橋は、金谷宿の東の入口八軒屋橋に対し、西の入口の大橋で、金谷駅の丁度裏側（南側）に当る位置であり、国鉄がなければ多少曲っていても迷わずに出られる橋である。

明治二十二年に、東海道本線金谷駅が開業したことにより、町並も、人々の生活も一挙に変えてしまったのでした。大橋（現不動橋）は、宝暦十四年の「明細帳書上」によれば、長さ六間、幅二間半となっている。川は矢沢川（現不動川）と言って、宿内外の分断の役目を果たしていた。そして、この橋を渡ると金谷宿の外に出たことになる。ここから金谷坂に入るわけであるが、確かに沿道は坂道となり家並が続いている。しばらく進むと、相良―金谷線の広い主要道にぶつかる。旧街道は少し左

に行き、道路を横断してピアノ教室や、生花、茶道教室のある急な坂道に入る。道幅は二メートル程度である。この辺から昭和四十年頃までは石畳であった。この金谷坂の石畳も、現在残っているのは庚申堂の上にある二十メートル程度だった。慶長六年、東海道に宿制が定められたわけであるが、当時は石畳がなく、金谷坂は急な坂道のため、雨の日は人馬が歩けず、雨水が鉄砲水になり人々は難渋した。そこで文政年間（一説には安政年間）、近くの村人が大勢出て石畳を造ったと言われている。現在庚申堂前までは、人家はあるが昔は殆んど無かったものと思われる。旅人たちは、大井川越え、急な金谷坂、菊坂、東坂、日坂と、さぞ難渋したことだったろうと、しみじみとした気持になるのだった。

この庚申堂の境内に、鶏頭塚、南向子安地蔵、庚申塔、俳人の歌碑、日本左ェ門着替の場などあるが、分間延絵図にはない。石畳のある地点から先は深い雑木林で、この道が東海道かと思うような細い農道のような道である。この金谷坂を登り切ると、急に視界が開け、南へ向けて牧野原の広大な茶園が果しなく広がっている。やがて県道吉沢―金谷線の舗装路にぶつかる。県道に出て、左（南）に折れると、明治天皇駐輦記念碑、芭蕉句碑、馬頭観音（三面八臂）、古墓石二基などが散在していた。しかし旧街道は金谷坂の出口から右へ向いて行かねばならない。県道に出て右に約三百メートル行った処に旧街道の入口があり、街道沿いの集落がある。これが牧野原村である。部落の中程の右手に鈴木きゑさんと、鈴川木工の路地入口に諏訪原城跡の標示が立っている。この奥の森の中に諏訪原城跡がある。諏訪公民館の前を通り、部落の終りの倉庫（納屋）がある。倉庫の所に旧東海道の六三〇メートルの標示がある。街道はここから県道を離れて急な坂道となる。自動車でも通れるが強雨の時は危険である。標示のように六三〇メートル菊川の里に向って、道は下っていくのだった。

――「絵図」による東海道の案内について――

この昔の東海道の案内図は、寛政（一七八九―一八〇一）中編集された「東海道分間延絵図」の解説篇（以下「絵図」と略す）により書いたものである。

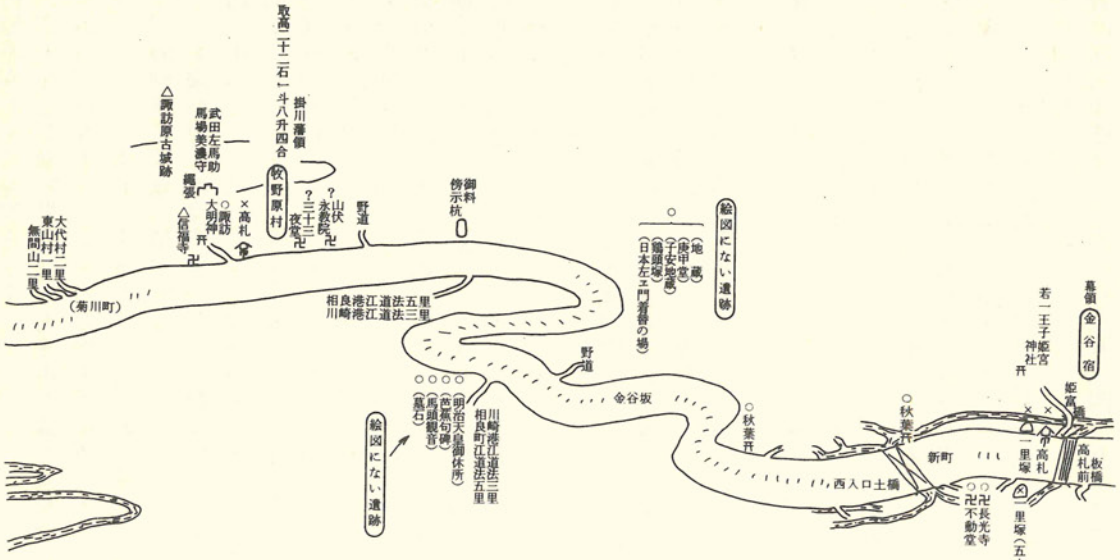
街道の案内は、この「絵図」の街道、宿町村及遺跡、遺物を追って、できるだけ忠実に調査を試みようとしたものであるが、時間が足りなくて充分にできなかった。

調査を実施してみると、街道は多少の差違や、現在の道路に重なっているものの、概要はつかんでゆける。

宿町村の地名は、現在変更されているものは傍に（　）して、現地名を付記しておいた。また現在の道路沿いにない村もあるが、それは時代の変化により境界が変ったり、或は飛び地があったりしたものと思われる。

遺跡、遺物においては、現在ないものもあるが、道路整備にじゃまになって、他に移動して違う場所にあったり、一ヶ所に集められ保存してあったりして、その場にはないが現存しているものが多い。

案内図には、「絵図」にあって現存しないものは、×印を付し、遺跡は△、未調査は？　を、また「絵図」編集以後に建てられ、「絵図」にない遺跡、遺物は（　）をして、その上に（絵図にないもの）と標示しておいた。



――宿制と街道の整備――

並木についての初見は、奈良時代に東大寺の僧普照の奉状によって、あまねく果樹を並木として植えた。（続日本記）（天平宝宇三年―七三九）

平安時代に諸国の駅路に果樹を植え、往来の旅人の休息に便した。（延喜式）

およそ百年間にわたる戦国時代が続き、道路整備まで手がまわらず、全国の大路から小路まで荒廃し、人馬の往来は大変困難な状態であったが、これを統一整備したのは織田信長であった。

天正三年（一五七五）四人の奉行を専任し、冬期の農閑期を利用して、海道筋を道幅三間半、その他を三間として、曲折の多い所は直道とし、中国の制にならって道の両側には松、柳を植えさせた。

秀吉も勿論、街道の整備を重要視して力を尽くしたが、全国統一を最終的に掌握した家康は、慶長六年（一六〇一年）大久保長安、彦坂元正等に東海道を巡視させ、伝馬を出すべき宿駅を定めた。即ち、東海道の諸国に命令して橋梁を修理させ、五十三の宿駅を定め、各駅は原則として、百人百匹の人馬を常備することに定めた。慶長八年（一六〇三年）家康は征夷大将軍となり、中央集権の実をあげるため、更に道路の整備につとめた。まず家康は、日本国中の人々の手によって、長さ三十七間余（約六十七メートル）、幅四間余（約七、二メートル）の橋を江戸に架けた。日本全国からの人の手でということで、誰言うとなく「日本橋」と呼ばれるようになった。（増訂武江年表）

その後日本橋は五街道の起点となり、東海道は官道として、幕府の全国統治に欠くことのできない交通路で、道中奉行が掌握して、必要に応じていろいろな施設をした。

――牧野原茶園とその発展史――

日本一広大なる茶園牧野原は、大井川と駿河湾を望む海抜百メートルから、百五十メートルの台地土に位置している。総面積五千ヘクタール、南北二十五キロと言われ、その総収穫は二万トンで、静岡県茶園総面積の四分の一である。

しかし、茶園が現在の偉容を誇るには数々の歴史を秘めていた。明治二年のことである。金谷坂の石畳を上っていく一団の武士たちがいた。二十歳代を主力として、三十歳代と、僅かな年寄りを含むその侍たちの、初めて見た牧の原台地は、赤松林のやせた土地であった。この武士団こそ、最初に牧の原に入植した旧幕臣の開拓団であった。

徳川幕府は、大政奉還、王政復古と戊辰の内乱の中で消滅して、領地高七十万石で駿府城に入府すると、財力のない藩は、旧幕臣の整理に困難した。明治二年ごろの調査によると、駿、遠、三に移住した藩士たちの数は、在勤者、不在勤者を含めて、約一万二千人（戸主のみ）程と言われ、身分の上下を問わず生活は苦しかった。このような状況の中で、先にのべた最初の開拓団は、徳川慶喜を護衛した戦闘集団で、後に東照宮がある久能村（現静岡市）に居住していた新番組の一隊であった。久能村に移住後の彼等の生活は粗暴であり、近辺住民にきらわれていた。

静岡藩庁は、新番組を「金谷開墾方」に編成し、明治二年より四年まで、開拓団にお手当金として、年間一万七百円を支給した。また廃藩置県の後に家禄奉還によって、明治政府より八万円を下付された。そして明治十二年には、政府よりさらに二万円を貸与された。開拓団の編成は、「金谷開墾方」とし、開墾方頭（隊長）に中条景昭、同頭並（副隊長）には、大草高重、松岡萬、服部一徳、入江兼明とし、二百五十余名の隊士が各班に分れて参加した。

入植者の割当面積は、平均一戸当り、四、五ヘクタールであったが、必ずしも均等でなく、例えば、頭（隊長）の中条は、七十六ヘクタールで、頭並（副隊長）の大高は、六十五ヘクタールといったように、職、階も加味されて配分されていた。

入植当時、地元村民と開墾方との間には、境界をめぐって紛争もあったが、ほとんどの場合村民側の敗北に終った。こうして茶園の開拓と経営が続けられたが、士族たちにとって大変苦難の道であった。まず、海抜百メートルから百五十メートルの台地に、水を求めて何本かの井戸を堀った。水は堀っても堀ってもなかなか出てこなかった。僅かに出ても水枯れの時期になると、下の沢まで水を汲みに行かねばならなかった。

武士たちの開拓事業は、農業技術の欠如、農作労働に対する忍耐力と相互の団結力の不足、また武士の気位いの高さもマイナス要因であったため失敗の連続であった。

一方明治四年大井川に渡船が就航すると、大井川の川越人足は失業することになり、その一部が農民出の丸尾文六の指導のもとに二百ヘクタールの土地を与えられ、今の丸尾原を農民的方法で開拓した。そして明治十年頃には、全国の製茶品評会において一等賞を受賞したのだった。また変り種の入植者には、幕末に坂本竜馬を殺害したと言われる今井信郎（今井沢）があり、そしてハリスに唐人お吉を世話した、下田奉行の伊佐口満があった。

ではこの牧之原の開拓を考え計画したのは誰だったのだろう。当時海外の事情に通じ、又国内の全般を展望できた勝海舟と言われている。彼は大久保利通や大隅重信に、将来の日本の輸出商品として茶の重要性をのべ、又明治政府の安定のための失業対策として提言した。そして開拓団はまず八万円が給付された。しかし、この下付金の分配のことで、開拓団は一括運用と分配論に分かれ、紛争して団結がくずれはじめ、ついには隊長の中条景昭不信任の声さえ出たのだった。これを憂い勝海舟は、大久保、大隅に働きかけ、破天荒な演出を考え出した。すなわち

明治天皇の北陸巡幸の途中、静岡の安在所において、中条、大草に拝謁をたまわり、天皇自らのおほめのお言葉をたまわったのである。

しかし、このような勝海舟の努力も、大草の部下の小島勝直の当時の日記によると、離農、脱走、転出、移住と書かれ、特に十三人を掌握する分隊長入江兼明の吉永村への移住は、殆んど隊としての統制が失われつつある状態を物語っている。

士族たちは百姓に仕事を命じたり、借金を強要したり、また返済を要求すると刀でおどしたりした事も書かれている。しかし、そのような士族ばかりではなかった。森盛澄のように、早くから農民にとけ込み、決して農民を呼び捨てにせず、子どもたちを農民と結婚させ、農業家として成功した者もあった。

明治四年の廃藩置県により、静岡藩よりのお手当金が無くなると、士族たちはいよいよ生活が苦しくなった。

手伝いの百姓は賃金の替りに土地をもらい、次第に請負制度となり土地は徐々に農民の手に移り、最初はいやいやながら手伝った農民たちも、武士たちの開墾の姿を見たり、その開拓した土地が、明治四年二百ヘクタール、明治十年四百ヘクタール、明治二十三年六百ヘクタールと実績が表われることにより、武士たちでもあれだけやるんだからと、より積極的な意欲ができつつあった。

一方開拓団は、いやな肥かけや、むつかしい茶もみ等、百姓にだんだん請け負わせ、手持ちの金も無くなり、土地は手離し貧窮のどん底にあえぎ、遂には家までも手放していった。そして、巡査や、商人、人力車夫などになるため、この地を去っていったのだった。そして明治二年に二百五十余戸の開拓団は、明治十六年には百十九戸となり、更に明治三十年には六十戸となり、現在士族で牧の原に残っている子孫は、大草家、和田家、森家、小島家、山名家、山本家、門名家、村田家、乾家、児島家の十軒である。そして開墾方頭並大草高重（岡田原）は、明治二十四年、中条景昭（谷口原）は明治二十九年に苦難な一生を終ったのである。

開拓団は十軒を残し牧の原台地より消えていったが、それに替って主役となった農民と、前記開拓団の一部士族および、川越人足（丸尾原）たちにより、大正四年には千六百ヘクタール、そして現在は日本一の茶園一万五千ヘクタールの大茶園に発展したのである。

旧幕臣の主な開墾地域、谷口原（一三五戸）、岡田原（二八戸）、南原（五戸）、庄内原（一七戸）、二軒屋原（一一戸）、六本松（二七戸）、安田原（一二戸）、大沢原（十五戸）、沢水加（三〇戸）、牛渕原（四八戸）、水呑原（八戸）、菅ヶ谷（別に相良勤番組の五十余名）。

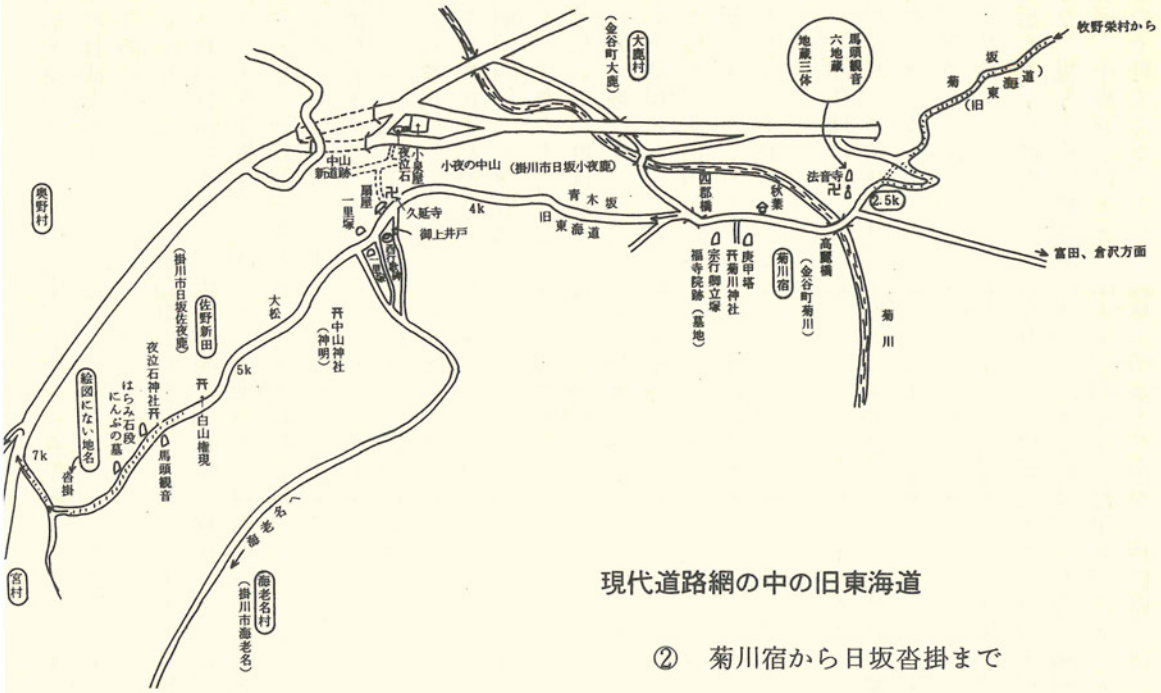
諏報原城跡と武田、徳川軍団の戦い

永禄十二年（一五六九年）に武田信玄が、金谷台地に五つの砦を築いたものの一つで、築城奉行の馬場美濃守信房（信春、氏勝）が、初代の諏訪原城主となった。しかし徳川軍は金堀りを使って、外郭から二の丸まで堀り通して攻略した。

天正元年（一五七三年）になって、武田勝頼は武田信豊（信玄の弟信繁の子、左馬助）と馬場信房に命じて再び築城した。

天正三年の長篠合戦のとき、徳川軍は六月より八月まで諏訪原城を攻め、ついに城兵は小山城（榛原郡）に走った。その後松井忠次が城将となったが、家康の諱を与えられて康親と称しまた城の名は、周の武王が殷の肘王を牧野に破った故事によって牧野と改めた。（「寛政譜」松井康親条）ここは遠州中部の高天神城（小笠郡）への中間の要地で、武田氏にとって重要拠点であった。天正十八年家康の関東移封で廃城（東海道分間延絵図解説篇）

現在城跡は、信玄得意の築城法三日月堀の乾堀跡が雑木林の中に点々と残っている。



現代道路網の中の旧東海道

② 菊川宿から日坂沓掛まで

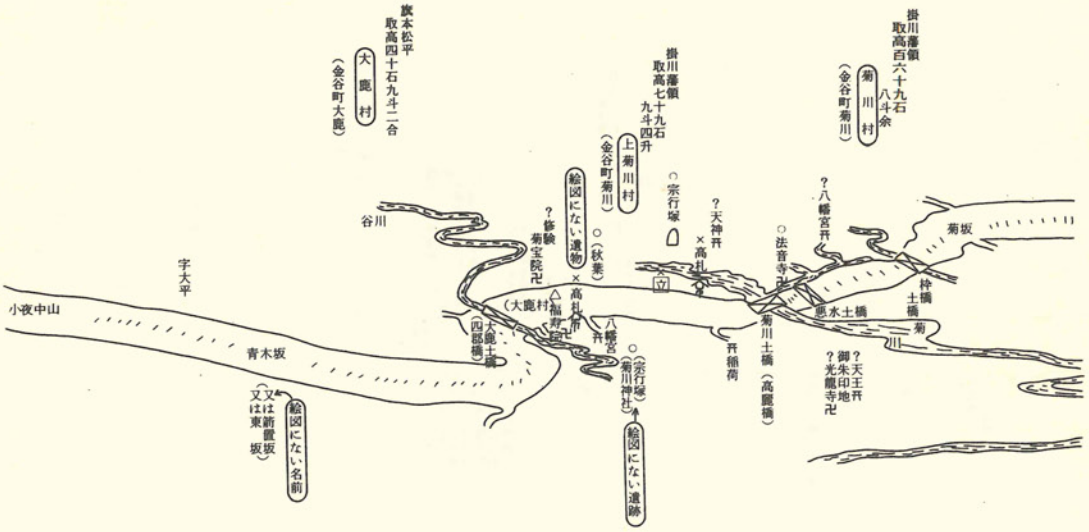
【現道路網の中の旧東海道案内】

――菊川の里から沓掛へ――

菊川の集落入口から菊川にかかる高麗橋までは坂が続いた。ここまでが菊坂であり、菊川宿であった。部落の中程右手に法音寺がある。境内外に六地蔵、馬頭、地蔵などがある。高麗橋を渡ると上菊川村である。江戸時代菊川宿は、東海道の間の宿として栄えた。金谷坂―菊坂と、やっとの思いで越えて来た旅人たちが、街道沿いに並ぶ茶店で一息入れる様が浮かんでくる。宿ではその他旅の必需品、飴の餅が売られ、旅籠も何軒か立地していたらしく、古老の話では、高麗橋東入口あたりに橋本屋（鈴木家）、いずみ屋（井村家）などがあったが、明治以降は商売はしていないとのことである。

宿には高札所が二ヶ所あり、人家も百戸位並んでいたと言われているが、現在でも戸数はその位である。部落の中程右空地に、秋葉堂がある。その先の左奥に菊川神社がありますが、おそらく江戸期の八幡宮の場所で、福寿院墓地、八幡宮、宗行郷之墓碑が一ヶ所に集められ、菊川神社になっていた。

部落の終りごろに四郡橋があった。菊川の支流の橋であるが旧街道は渡り終った所を左に折れて、その先のふたまた道の右のコースを取り登って行く。（四郡橋を若し直進すると、菊川にかかる新谷橋を渡り、その先の三差路を左に取ると、国道一号線のガード下に出る。ガードをくぐりなお直進すると、県道佐夜鹿線（旧国道）の菊川橋のバス停の所に出ますが、この辺が四郡橋を含めて昔の大鹿村内でした。）坂は一キロ位の間続くのであるが、この坂は小夜の中山峠道の東の坂で、東坂とも言われ、青木坂または箭置坂ともいわれている。大体のぼりつめたところに最初の民家があり、二軒目の鈴木儀一さんの先が金谷町と掛川町の境界線になっている。そしてこの附近までが大鹿村大字大井平であった。そしてこの先、小夜の中山、佐野新田、と馬の背のようになだらかに横たわっているさまを、「小



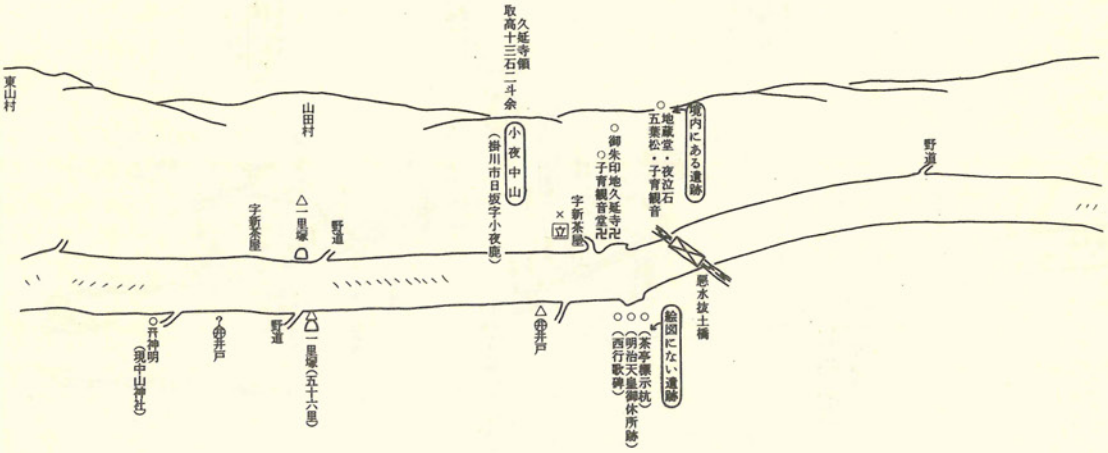
夜の中山峠道」と呼び、旅人たちはつらい苦しい青木坂を、峠の茶屋にたどり着き、そこで各地のニュースをお互いに伝えあったり、また夜泣石のいわれを聞いたりして、しばしの疲れを休めたことであろう。

峠の茶店扇屋の前の公園に、最近市で建てた西行法師の歌碑がある。

「年たけてまた越ゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山」と、したためてある。平安末期の文治二年（一一八六年）二度目の東国の旅に出た六十九歳の西行法師が、険しい沓掛の坂をのぼり峠に着いた時の心境である。その当時の小夜の中山は、背の低い雑木林の細い峠道であったと言われ、江戸期になると徳川家康が、街道を広くしたり、両側に松を植えたりして歩かやすくなった。この小夜の中山の領地は、久延寺の領地であったが、標高百三、四十メートルの雑木林を切り開き苦労して作った田畑で、米の取高は慶安年間に十三石二斗と記録されており、その殆どが畑であった。もしかすると当初は、焼畑農耕であったのかもしれない。そして後に一キロばかり西の佐野新田に、水田を開墾した八戸ほどの水稲農家がいる。石高は、七石五斗九升六合と記録され、神谷助次郎の新田開発地はこの僅かな水稲農家に支えられていたのである。

江戸の中期以降になると旅がだんだん庶民のものになって、往来する人々がふえるに従い、この山深い峠の茶店の数も多くなり、文献に記録されているだけでも四軒程ある。立場茶屋（小泉屋）は別としても、新茶屋（現在の扇屋か）大松（鈴木延幸氏宅）大岩富士見屋などがそれかと思われる。

明治になり、日本初の有料道路中山新道が完成すると、険しい峠道をさけ、比較的へいたんな中山新道が人々の通り道となった。それにつれて峠の茶店はさびれ、今はその面影をしのぶ久延寺の隣の茶店「扇屋」の鈴木春恵さんだけが残って、子育てあめやジュースなどを売っている。

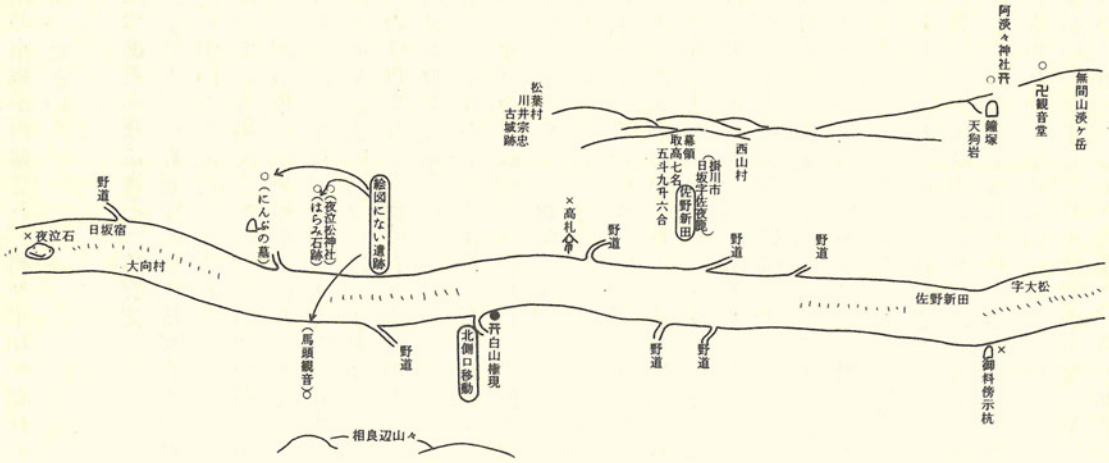


真言宗久延寺の開基は定かでないが、慶長五年（一六〇〇年）上洛する家康のために、掛川城主山内一豊が茶亭を建て接待したが、いつの頃か茶亭がなくなり、宝永年間に伊奈半左衛門の掛りで、境内に御殿が造られたが、寛永年間に焼失してしまった。（宿村大概帳）境内には、地蔵堂（本堂）、子育観音堂、徳川家康が自ら手植したといわれる五葉の松などがある。

久延寺が有名になった夜泣石は露天に置かれてあった。本来の夜泣石は佐野新田の先の道の中央にあった。参勤交代の大名の列は、その石のため両方に別かれて通ったという。明治元年になって、明治天皇が上洛の時、この石を取除くため苦労したといわれる。ちねみに石の重さは九百キロ、高さ六十センチであった。現在国道一号線の小泉屋の台上に一基と、久延寺のこの石と二基あることになる。さまざまな説があるが、久延寺の境内のものは石も新らしく、小泉屋のものが本当の夜泣石ではないかと思われる。

久延寺と扇屋の間が空地になっている。そこから北に向って一本の道がある。これが久延寺と、国道一号線脇の小泉屋とを結ぶ最短距離の道である。少し奥へ入ると、杉と雑木の間を細い道が急坂で下り、やがて中山新道のひなびた道にぶつかる。新道を右に折れてしばらく歩いた下に夜泣石のある小公園がある。これが小泉屋の上にある夜泣石で、覆屋根もあり、小泉屋に通ずる石段は大変立派だった。さすがに便も良いため、観光客も多くにぎやかだった。

「絵図」によると峠道には、遺跡、遺物、神社が次のように記載されている。井戸が二ヶ所、一里塚、神明社、御料傍示杭、高札、白山権現、夜泣石のあった場所稲荷社である。井戸の一ヶ所は、久延寺の前の道を入った右側に、御上井戸として標示杭があった。他の一ヶ所は未調査であるが、とにかく峠では井戸は大変大切である。一里塚は少し西に歩くと南に入る道がある。その西角の南側を三間程入った竹籔の後に、盛土が少し残



っている。北側は鈴木正一さん宅の裏側に残部が残っていた。私たちは、正一さんにほうき草の種をもらってそこを出た。しばらく歩くと左側に神明社の森がある。土地の方に聞くと今は中山神社となり、この地区の氏神で「お宮さん」と呼ばれていた。大松の茶屋と言われた。大松の鈴木延幸さんのお宅を右に見て、四、五百メートル先の神谷俊一さんのお宅で、御先祖からの言い伝えや、昔の街道、部落の生活をお聞きしたいと思ったけれど、残念なことにお留守だった。この原稿には間に合わなかったので、別項にその話を書き入れたいと思っています。絵図の白山権現は街道右側奥に、東を向いて立っている黒色の小祠で現存していた。その先に絵図にはないが、夜泣松神社の小祠と、馬頭観音の供養碑があった。蛇身鳥退治の藤原良政の娘小石姫と家臣の橘主計之助の悲恋物語の碑である。

夜泣石は最初この先の道の真ん中にころがっていたといい、昔の大名や、明治の天皇行幸の際も、両側にわかれて通行したと言われている。今は夜泣石跡の標識が立っているが、先に述べた如く、夜泣石自体は、久延寺の境内に一つ、国道一号線の小泉屋の上に一つあり、伝説そのものより、その後に起きた人間の欲望の係事の方が、より歴史の現実があると思われた。その先右側の茶畑の台上に妊婦の墓を見るころから、沓掛の急坂は六、七軒ある民家の間を通りながらはじまるのだった。この駆けおりるような坂の終りの、国道一号線の段丘上にも、何軒かの旅篭があったが、今は平な屋敷跡のような所を見てしのぶしかなかった。

武田、徳川軍の決戦により戦場と化した菊川の宿

天正三年の長篠合戦の後、徳川軍は武田軍の諏訪原城を、同年六月より八月の間猛攻した。戦は城に近い菊川宿においても行われ、この百戸ほどの集落は戦場と化し、民家は焼かれ宿の人々は他の地域へ逃げていった。この金谷と日坂の間の宿（あ

いの宿）菊川の宿場が再建され、再び平和が訪れるには、それから数年かかったという。

現在二つある「夜泣き石」の歴史

「絵図」によると、佐野新田の白山権現の先の路の真ん中に有名な「小夜の中山の夜泣石」がころがっていた。現在の夜泣石の標柱が建っている場所である。この夜泣石が現在久延寺の境内に一つと、国道脇の小泉屋の上に一つある。

伝説「夜泣石」は、小夜の中山の小寺、久延寺を有名にし、茶屋で売られた飴を伝説に結びつけ、「子育飴」として売られたのである。何の変哲もない一個の石が当時の人々の心をまどわし、またその後も数奇な運命をたどるのだった。

伝説によると、小夜の中山に住むお石という女が、菊川の里へ働きに行った帰り道、絵図の「夜泣石」の位置で、陣痛の痛みに苦しんでいるところへ、轟業右衛門という男が通りかかり介抱しているうちに、お石が金を持っているのを知り殺して金を奪って逃げ去った。その時傷口から子どもが生まれた。お石の霊がそばにあった丸石に乗り移り、夜毎に石が泣いたので、「夜泣き石」と呼ぶようになった。生まれた子どもは音八と名づけられ、近くの久延寺の和尚にもちや飴で育てられた。音八は成長して、やがて大和国の刀研師の弟子になり立派に成長した。そして或日そこへ轟業右衛門が刀研に来て、刀こぼれのことから、かつて小夜の中山で妊婦を切った時に、石にあたったためだと話す。音八は「それは自分の母だ。」と名乗りをあげて母の仇討をした。これが伝説「夜泣き石」のあらましである。

掛川市教委発行「文化財のしおり」にあるものは、女が遠い武蔵の国に住んでいる夫を尋ねて行く途中、一人の悪者がとあり、また久延寺の和尚が弘法大師となっている。いずれにしても、この伝説がいつ発生したのかは定かでないが、恐らく室町期には人々の間で語られるようになり、時が過ぎ、中山峠を旅する人が増えた江戸中期の庶民の文化が栄えた時期に、滝沢馬琴の小説に書かれ、また広重の東海道五十三次の絵に書かれて全国的に知られるようになったのだろう。

「夜泣き石」は長い間街道の路の真中にあって、大名行列などは左右に分かれて通り困ったという。広重の絵で見る通り、旅人が石を囲み物珍しそうに手で触れたり、語り合ったり、中には手を合わせて拝んで通った者もあったのだろう。

伝説「夜泣き石」は、明治になっても人々の間に伝わり、明治元年に明治天皇上洛の時、通行のじゃまになるので取り除かねばならなくなり、高さ一メートル、重さ九百キロのこの石の移転に、日坂村の村人たちは大変困ったという。

時は移り、江戸時代には朱印領十三石あった久延寺も、明治になって廃仏棄釈等で収入の道がなくなって困り、日坂村の豪農杉本権蔵（日本初の有料道路、中山新道の建設者の一人）と小夜の中山の茶屋（小泉屋）の八代目の当主、小泉豊という人から二百五十円を借り、明治十三年になって、東京浅草で勧業博覧会があり、その時和尚は見せ物にしようとはかり、この九百キロの「夜泣き石」を、荷車に乗せて金谷坂を下って大井川に運び、大井川から舟で川崎港まで川を下り、さらに川崎港から大型船に乗せて品川港まで運んだという。

ところが、本物の「夜泣き石」が久延寺から運び出されるころ、東京では興業師が張り子の偽物「夜泣き石」を作り、中に赤ん坊を入れて「これぞかの有名な小夜の中山の夜泣き石、泣かせて見せます」と、張り子の中の赤ん坊を泣かせるという演出をして、大いに人気を得て大もうけをしたという。

本物の「夜泣き石」が着いた時には、さかりが過ぎしかも赤ん坊は泣かないというわけで大失敗をし、船賃等で金は使い果たし、帰りに焼津の和田港まで運んでほったらかしてしまった。杉本権蔵と小泉屋がその「夜泣き石」を取り戻しに行ったのは、半年後であった。現在は国道沿いの小泉屋の上にあるのがその

石である。

昭和十一年、今度は、東京銀座の松坂屋で開かれた静岡物産展に、「夜泣き石」が見せ物として出されることになった。九百キロの大石をエレベーターで七階まで運び上げた。物産展は大盛況で、人々は「夜泣き石」を一目でも見ようとごった返したという。ところが翌十二年、「夜泣き石」をめぐって、久延寺と小泉屋との間で裁判となり、久延寺は敗訴した。

平安の昔からだんだんとすじができあがり、語り継がれた伝説「夜泣き石」にまつわる、この昭和までのさまざまな歴史は人間の物欲の歴史ともまじわり、私たちに釈然としない思いを残すものである。（静岡新聞「いま街道は」による）

一里塚について

現在の掛川市地内の一里塚は四ヶ所あった。先ず江戸より五十六里の地点の小夜の中山（掛川市日坂佐夜鹿字新屋）に、左に榎、右に松の木（宿村大概帳）があり、次に五十七里が牛頭村（現掛川市伊達方）地内に、左右共に榎、その次の五十八里は増田村（現掛川市葛川）地内にて、左右松の木、次の五十九里は左側長谷村（現掛川市長谷）、右側は大池村（現掛川市末広町）で両側共に松であった。

次に一里塚について大要を述べると、

「宿村大概帳」（天保末年）によれば、東海道の品川と京都間の百二十五里二十町の間に、一里塚は四〇四ヶ所あって、塚には木を植えることを定めとされていたが、実際に植えてあったのは八十五パーセント位であった。大きさについては、「一里塚五間（九メートル）四方也」（当時記）とあって、随分大型であったが、その後幕府から補修や築造を指示したような文書は見当らず、欠損してもそのまま放置されていたようであった。また一里塚は街道の両側に築造とされていたが、三島市の笹原新田の一里塚のように片側だけというのも珍しくなかった。江戸時代の旅行案内図には必ずこの一里塚が記入され、旅人の日程を立案するに役立てたり、人々の道中の目安としたり、また馬や駕籠の賃銭の支払いの目安にしたりした。

秋葉山信仰から各地に置かれた秋葉常夜灯

秋葉山信仰については、神仏が習合したものであり、祭神は「火之加具土大神」と言い、仏説では本尊は「聖観音」で、開基は行基菩薩というが、また一説では加賀白山の開基、泰澄大師ともいう。宗派はともに古真言宗に属していた。行基も泰澄も山岳修行の祖として仰がれる人であった。中世に入ると密教寺院として民衆に信仰され、山内には数多くの修験房をもった山岳道場になった。

火防の効験で知られる秋葉山は、静岡県春野町領家にあって海抜八百六十六メートル、赤石山系の南端に位置しており、土地の人々は「天竜川を蛇体にたとえれば、鎌首をもたげた所が秋葉山であり、つまり奥の院のある龍頭山である。」と言っている。

この秋葉山を中心とする秋葉路（秋葉街道）は、山続きの勝坂（龍頭山）、常光寺山（山住山）を経て、遠山の各嶺々に至る修験の路であり、人々の交易の路であり、さらに室町期以降は軍征の路ででもあった。生活道としての交易の路は、遠州灘の各地より浜松、見付、掛川を経て馬の背に積まれ、また後には天竜川を舟に積まれて運ばれ、人の背にて秋葉山上や水窪に担ぎ上げられ、信濃遠山に出ると、ここを拠点に高遠や飯田に送られたのだった。「行き荷かち栗、帰りは塩か」と唄われたように、交流はさかんに行われ、修験者たちは人々のために路を整備し、要所要所に駅を設けて通行の便をはかった。そしてさらに修験者は商いの保護をするのみならず、自分たちの信仰圏を広めたり、情報を蒐集したり、あるいはこれを人々に伝達した。このため秋葉尾根路は嶮しくとも掠奪の恐れのない安全

な路となった。

こうして人々の往来がはげしくなり、修験者の活動の結果、中世末期には各地に秋葉講中が組織され、街道には、白衣に菅笠、金剛杖に念珠姿の秋葉信者の参詣が絶えず、信濃から二俣を経て浜松の信濃路、三河鳳来寺からの三河路、掛川からの遠州路などをはじめ、遠近の各宿町村より数多くの「秋葉みち」が拓かれて、常夜灯や一里塚を兼ねた道標が建てられたのだった。

しかし、こうした民衆の信仰は、本尊の聖観音や、祭神の迦具土大神でなく、合祀された三尺坊大権現であった。三尺坊とは、信濃国下伊那郡千代村の出身で、最初戸隠山で修行し、後に越後長岡の蔵王堂三尺坊に居住し、不動明王の法を修めた修験者で、神通力を得て後、白狐に乗って秋葉山に飛来し、火防の術で民衆を教済した聖者であったと伝えられる。

道祖神信仰について

サエの神とも言い、仏教の大道輪廻思想と結びつき、村落から外敵や疾病を除災し、生死を司る神として大観音や、大地蔵を祀ったり、男女の二神を並べて配していた。また、神霊のある丸い石などを神として、村落の辻に祀って崇拝していた庶民信仰の一つで、後世に至って道路の神、旅の神とも称され道行く人々に信仰されてきた。インドでは、男の性器をリンガと言って、これを道の辻に祀る風習があった。日本にも仏教と共に中国から伝えられたというが、明治政府はこの像を淫祠であるとして禁止した。一月十四日に子どもたちが火を焚いて、サイトヤキといい、道祖神祭を行う地方が日本に残っている。

馬頭観音について

日本での馬頭観音は七観音の一つとして、奈良時代以降に信仰されるようになった。観音菩薩とは、正しくは観世音菩薩、あるいは観自在菩薩と言い、七観音とは、聖観音、如意輪観音、十一面観音、千手観音、不空羂索観音、准胝観音、馬頭観音がある。

観音信仰には、西国三十三ヶ所、坂東三十三ヶ所、秩父三十四ヶ所の合計百観音霊場があり、掛川を中心にした地区にも遠江三十三ヶ所観音札所があり、馬頭観音は観音信仰の一つであった。そして梵名を何耶揭哩嚩といい、訳して大力持明王、または獅子無畏観音、あるいは馬頭明王といわれ、観音部から脱して明王部となる場合もある。

馬頭観音の像容は不定であるが、主なものには三面二臂、三面八臂や、一面二臂、一面四臂、一面八臂で、中には四面のものもある。そして特徴としては頭上に馬頭を頂き、三面の場合、中央の一面が菩薩面、左右二面が忿怒面を持っているのが通常であるが、中には三面とも忿怒面のものもある。馬頭を持つ理由は、ヒンズー教の最高神の一つであるビシュヌ神が馬頭に化身して敵を倒したという神話からきたものと言われている。以上が観音伝説のあらましである。

鎌倉時代になると戦に馬を使うことが多く、主として武士を中心として信仰されたと言われるが、近世以前の遺物は少なく木造の馬頭観音立像であった。石仏の馬頭観音が造立しはじめたのは徳川中期以降であり、このことは農民が自分の馬を持てるようになったことを暗示するもので、荷物運搬に馬を使った馬持農民が中心となって、観音講をつくり賃金の協定、初午などの行事、碑の造立などを行ったことを物語るものと思われる。農民たちは、田畑の耕作や、人や荷物を運搬して、賃金をかせいでくれる馬を、人間同様時にはそれ以上に厚遇した。そして当時盛んになってきた地蔵信仰の影響も加わって、無病息災や旅の安全を祈る馬頭観音を造立したり、また馬が死ぬと観音や地蔵の姿の墓標仏を建立したりして供養したのだった。牛や馬が死ぬと各村々で決められた捨場に持って行った。そこに馬頭観音が見られることもある。そしてまた中部地方の山路を歩く

と、よく見られる馬頭観音は、馬背による交通と関係が深かったことが理由と思われる。捨場は近世被差別部落との深い意味を持つものであって、「死馬捨場」と呼ばれていたことから考えると、馬の使用は広く普及していたけれど、牛は殆んど飼育されていなかったらしく、牛が一般に飼育されたのは明治中期以降のことである。

明治時代に入り、他の石仏の造立が衰えたにもかかわらず、馬頭観音のみはピークを迎え立てられた。この時期の馬頭観音の殆んどが合掌座像と型が決まってきたのである。ちなみに石造物で遠州地方最古の馬頭観音としては、万治三年（一六六〇年）六観音の一尊として造立されている。磐田市鎌田の医王寺のもので、農民信仰を対象としての最も古いものは、宝歴六年（一七五六年）に立てられた、三ヶ日町只木の夢寂寺にある文字碑の馬頭観音である。

【昔の面影をしのべる日坂宿】案内

日坂宿の名の起りは、中山峠を中心として、東の坂を東坂（青木坂）、西の坂を西坂と考え呼ばれたものであり、後に西の字をなまって日の字を用いるようになったとすることが正しいと思われる。金谷町からの道のりは一里二十四丁、私たちの実測では約七キロであった。宿はやや下り勾配で、上町（本町ともいう）、下町、それから古宮橋を渡ると、古宮町と、約六丁半にわたって軒並が続き、ところどころ火事の退避用の空地を配した町だった。そして東入口は二十二間程の石垣があった。理由は、山の土砂崩れを防ぐためのものであろう。

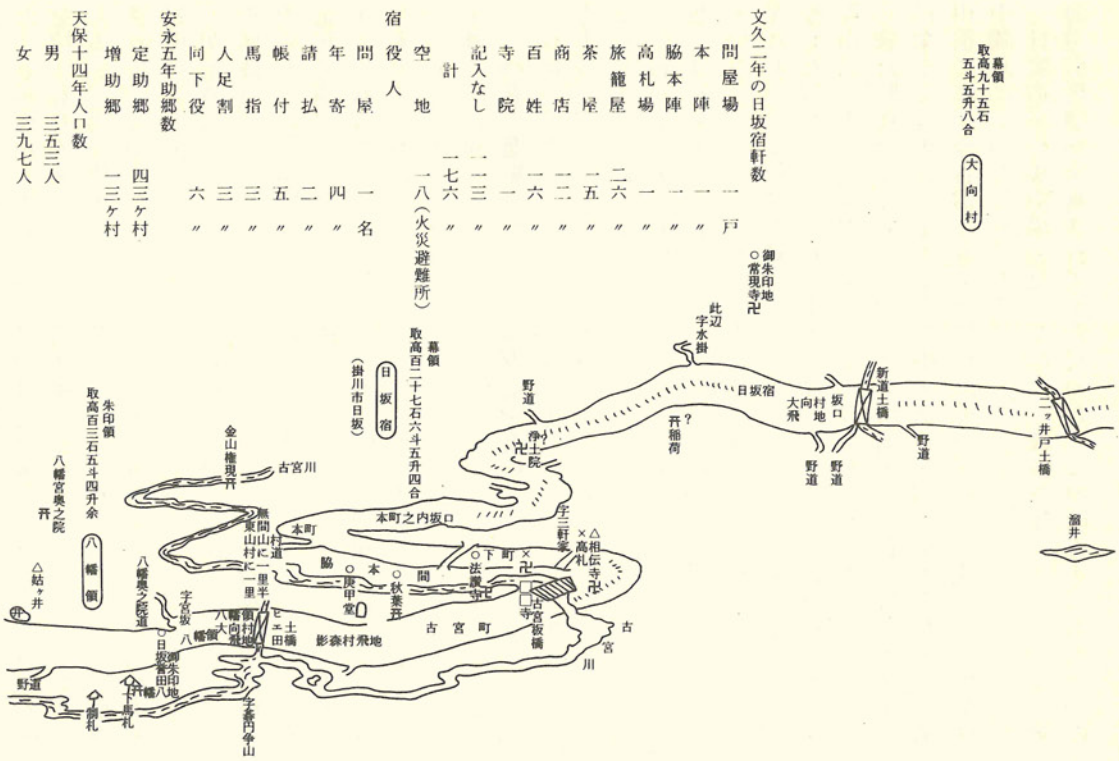
鎌倉時代を頂点として栄えた菊川宿がさびれ、日坂宿が新たに栄えた理由は、金谷宿――掛川宿の中間点を考えた場合、菊川宿では、金谷宿に近く掛川宿に遠い。それに比べて日坂宿は中間点にあったためである。

日坂宿が正規宿場となったのは、慶長六年（一六〇一年）東海道伝馬制が実施されてからだった。この時五十三次の一つに選ばれて、問屋場ができ本陣一軒、脇本陣一軒、旅篭屋三十三軒ができ、伝馬は当初三十六匹が常備され、上伝馬、下伝馬、（今の本町、下町）の伝馬屋敷が在り、役人の公用に使われた。掛川誌稿によると日坂宿の伝馬は、寛永二十年には百匹となったと記されている。

宿の男三百五十三人の内三百人位は、旅人たちや、役人の荷物を運ぶ人足として働き、女たちは旅篭の仕事で毎日の生活をすごしたのだった。

日坂宿は掛川藩の支配でなく、徳川幕府の直轄支配地であったため、中泉代官の支配を受けていた。宿の構成は別表の通りであった。貧しかった日坂も、宿の指定により徐々に開け、特に旅が庶民のものとなった江戸中期以降から幕末にかけては繁栄した。しかし嘉永五年（一八五二年）正月三日の夜当大火が起った。火は強風にあおられ、みるみるうちに宿場全体に広がり、本陣、脇本陣をはじめ大半が焼け落ちた。この後仕末のため、貧しい家は掛川宿より借金をしたりして、何とか再建したのだったが、十六年後明治時代に入り、同三年片岡本陣が破産し、それに連動して、其の後脇本陣も店をたたんでしまった。そして日坂宿は、この時の大火と、文明開化の政治、経済の変化に対応できず、宿としての歴史を終ったのだった。

上町（本町）の日坂幼稚園の片隅にある、安政三年十二月と彫られた秋葉常夜灯が昔のまま残り、細い街道沿いに、格子戸や、おろし戸の家が並び、左に百二十年の歴史の重さが感じられる旅篭川坂屋の前の坂道を出て、古宮川（逆川）の古宮橋に至る。手前右側に相伝寺の入口があり、そこには高札場跡があって、それと共に江戸期からの歴史をしのばせる秋葉常夜灯、庚申塔（青面金剛）を中心とした石仏群が並び、地蔵堂があり、さらに橋を越えて十三、四軒行った処の左側には、茶屋（いしや）の十七代目の内田美代子さんの家がある。現当主を、内田由弥さんという。



このように、東の入口から西の出口まで、僅か三、四百メートルの町並を歩いてみて、つくづく思うことは、日坂の町ほど昔の面影をしのばせてくれるところは、他に少いだろうと思った。

宿場の防備と治安対策

江戸時代、東海道の宿駅が定められると、宿場の治安を保つため各種の治安対策が行われた。その方法は、支配領主、地形等で差はあるが、沼津、府中、掛川などの大宿は旅人への監視が厳しく、入口木戸の周囲にコ形の石垣や竹の柵を囲み、番所を置いて役人が交代で旅人の出入りを見張ったり、物資の出入りを監視したりした。また、菊川、日坂、袋井などの小規模の宿場は、木戸はないが宿場の東側に川を堀って木戸の代りにした。

一方宿場の防備に対しては、掛川宿や袋井宿のように、川が宿全体を囲んでいる所もある。また浜松や掛川など、街道をわざと分かりにくくするためコの字型にしてある所もあった。日坂宿の古宮橋など後に土橋になったけれど、もとは板橋で、敵が攻めてきた場合はこの木橋をはずして宿を守るためであった。また、川は外敵に備えるのみでなく、宿の人々や、旅人の生活用水となり、防火用水の役目をも果たしていた。

日坂宿の大火

案内でのべたように、嘉永五年（一八五二年）正月三日の夜半大火が起った。強風のため火勢は強く、日坂の宿は大半が焼けてしまった。

この時の事を、桂下園岩井政右衛門という当時の人が、「巖ケ根雑誌」と題し、日記式に著作した古文書を、日坂小学校長の松下巳作先生が解読した。

その日坂大火の項によると、大火の原因は、最初旅人が夜中往還を通行しながら煙草を呑み、火の消えない吸いがらを落と

し、それがごみに移って大火となったと言うことで、一応事件が済んだとされた。ところが後日になってのうわさでは、実はその夜大黒屋格右衛門の屋敷で賭ばくがあった。その時一人の女がある男に恨みがあり、その恨みをはらすため、座敷の床下に火を投げ入れて大火になったのだという。そしてまた当時の人々は、火事になれば焼失するのがあたりまえだという認識を持ち、誰一人消火しようという気持ちがなかった。とも書き記してあった。

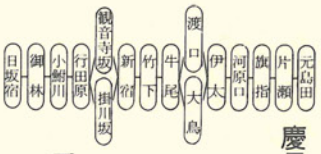
当時岩井政右衛門は、質屋渡世を開業したばかりで、店では太物、荒物、小間物等を商い、傍らで豆腐を製造販売していた。そのために質屋家業も、質物が焼失したりして苦労したいきさつをこと細かく書き、町のその後の状態を描写し、後世の人たちに警告している。

日坂宿の伝馬の人々に尽くした片岡清兵衛

日坂宿の本陣で、二代目に片岡清兵衛という立派な人がいた。日坂の常現寺の建立に、文禄年間（一五九二―一五九六）に多くの建立資金を出した人である。当時日坂宿は人口七百人ほどで、その生活は問屋場を中心に、本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠三十三軒で、女は旅籠の仕事、男たちの三百人は大半が役人や旅人たちの荷物を運ぶ人足として働いていた。

江戸時代になると、参勤交代で大名の往来が激しくなり、日坂宿は繁栄したが、大名は人足賃を支払うに一番早かったのが天保十五年（一八四四）薩摩の島津氏が、琉球使節団を案内して江戸に下った時で、それでも手当金を払ったのは三年後であったという。人足たちは働いても金が入らないため生活が大変苦しかった。これを見かねた片岡清兵衛は、死を覚悟して幕府に直願した。直願がかなって、毎年五百十六俵が日坂宿に支払われるようになった。しかし清兵衛は慶長十八年（一六一三）死罪となり、刑場の露と消えた。日坂の人々は、今でも片岡清兵衛を「五百十六俵様」と言い伝えているという。

現在日坂常現寺の本堂の裏に、片岡清兵衛の五輪供養塔が建っている。



慶長九年から元和元年の十一年間にあった東海道

一、慶長九年宿駅の制がしかれたばかりの島田宿は慶長九年の大井川の大洪水で押し流され、一面の河原と化した。そこで古くから拓けており、古代からの交通の要衝元島田を仮宿とし、元和元年に島田宿が復活するまで、ここで一切の業務を行った。

二、この十一年間の道は、藤枝から山沿いの島田市東光寺、野田、元島田、片瀬、旗指、河原口、伊太村、笹久保を通り、大鳥から大井川を牛尾に渡り、竹下、新宿を抜け、観音寺坂または掛川坂から行田原に上り、小鮒川沿いに大鹿、日坂へ至る道であった。金谷町の牛尾周辺に相賀道、宿通り、町家、一里塚、新宿等の地名が残る。

三、またこの間の東海道の一里塚が、金谷城下（金谷町城下）にあり、現在は茶畑で大正時代までは石碑があったという。

そして、「掛川誌稿」に「横岡村、大道と云所の田の中にあり」と一里塚のことが記されている。

庚申信仰について

中国の道教に基づく信仰と、仏教がからんだものといわれている信仰である。道教の教えによると、人間の体内に三尸神という、俗にいう獅子身中の虫が三匹いて庚申（かのえさる）の晩に、この三匹の虫が爪の先から出て天に昇り、天王の玉皇大帝（北極星、妙見さん）にその人の悪口を言いに行くとされている。天王はこれを聞いて、鬼籍のエンマ帳にその人の寿命を書き、前もって死ぬ時刻を定められると言われ、庚申の晩には三尸神の悪口を言わず徹夜して行いを慎むか、その晩は皆が寄

って、長時間話し合う風習があり、平安時代に朝廷においても庚申信仰が行われた。（日待講）

路傍の庚申塔に、「見ざる、言わざる、聞かざる」の三匹の猿が描かれてあるのは、三つの教えを守らないと、庚申の晩が恐ろしいぞと反省を促したものという。

庚申の晩は、なるべく長く徹夜で雑談をする風習から、「話は庚申の晩」という言葉ができ、またこの晩に妊娠すると、その子は泥棒になると言われて、男女の性交を忌む風習があった。密教では庚申の本尊として、青面金剛を祀っている。また、神道の説によって、主尊を猿田彦としている地方もある。庚申塔や青面金剛の軸には、ほとんど三猿になっているものが多いが、中には三ヶ日町下尾奈の竜谷寺門前の庚申塔のように、鶏が彫られているものや、同じ三ヶ日のショケラ庚申塔のように、青面金剛の手に髪をつかんでぶらさげられている、半裸の女人の彫られているものもある。比較的出典に忠実に描かれているといわれる掛軸の青面金剛を見ると、血走った眼、逆立った髪、蛇をまとい髑髏を胸に飾り、手に剣やら弓矢を持った姿である。一体、神だろうか仏だろうかと判断に迷う。庚申の実体について逆のぼっていくと、浜北市宮口の庚申寺の本尊が十一面観音であるごとく、古代インドのバラモンの神、十一面荒神に行きつくものと思われる。

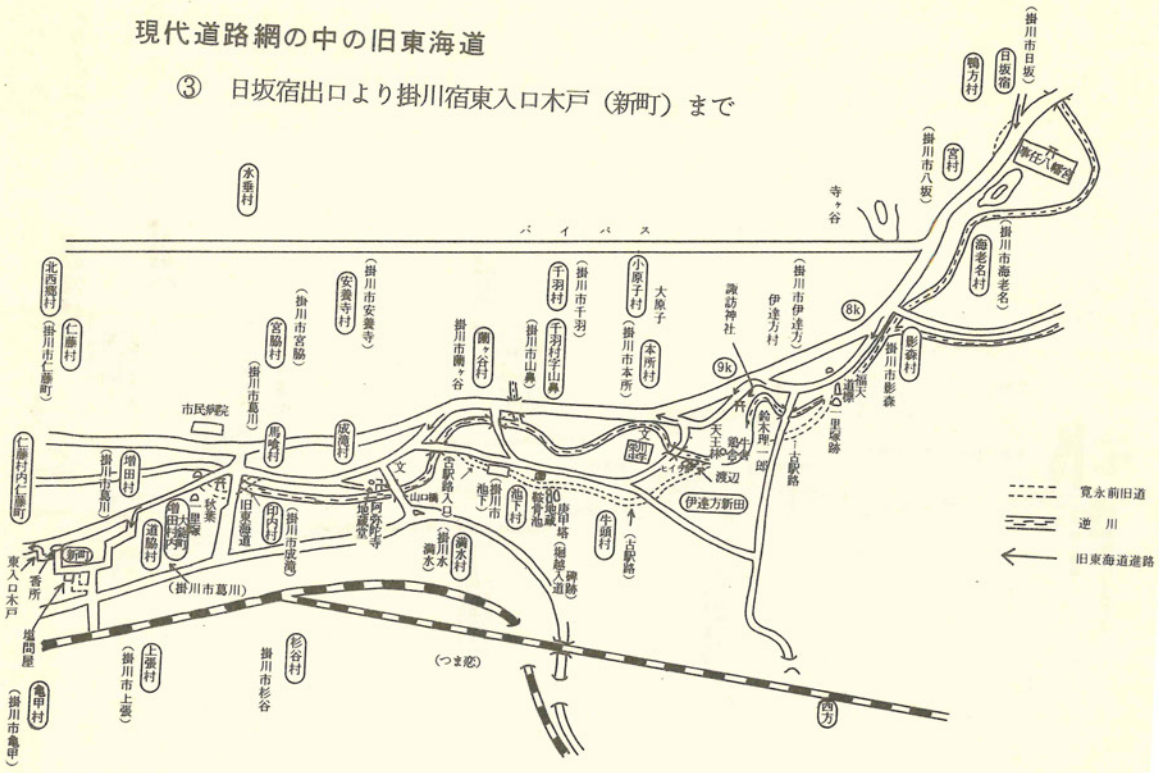
日坂宿西出口より掛川宿東入口木戸（新町）まで

日坂宿の西の出口を進むとすぐ国道一号線に出る。街道はまた国道と合流して西へ進むのであるが、今までの私たちの感慨を笑うかのように、広い近代的補装道路上を、たくさんな車が走って行く。しかし感慨は感慨として、やがて左側に式内社、日坂八幡宮があり、味よし食堂の前には八幡宮と、龍宮と、嫁石権現の伝説を持つ雄鯨山雌鯨山が横たわっている。さらに、右手宮村公会堂附近には、長者屋敷、姑ヶ井、嫁ヶ田の伝説もある。宮村公会堂の東の道脇には、庚申堂と庚申供養五輪塔があり、その奥に松寿院跡、さらに奥には鴨加次郎の古城跡もある。元街道であったドライブイン静岡の地内を右に見て、掛川バイパスの入口を越えると塩井川原に出る。まだよく調査していないけれど、「広重」や「弥次喜多」で有名な、塩井川原の渡を越える場面があること、それと、「絵図」とで考えてみると、逆川にそそぐ北からの相当に広い川があったと思われる。八坂の陸橋を越える手前左側に八坂橋があり、それを通過して南東に行く道が、海老名の谷筋の道である。なお陸橋をくぐって左手、川向うに塩井権現（現塩井神社）が見える。街道はその先から国道一号線を別れて県道に入る。その入口の榛葉さんの敷地内に、「絵図」の一里塚手前の秋葉常夜灯は移されていると言われるが、私領傍示杭とか高札は勿論なかったし、また場所も定かでなかった。

江戸から五十七里の一里塚は、牛頭村（現伊達方）の萩田理髪店と、手前の鈴木計夫氏宅の間の福天権現に通ずる脇道に入り、丁度鈴木宅の裏庭あたりにあったと言われ、ここが字滑川である。右側の一里塚は、一里山で場所は今のところはっきりしていない。この一里塚を記念して、理髪店の萩田さんが立派な標示杭を店の前に建ててあったが、昭和五十七年九月十二日の十八号台風で、この附近は水害に合い、押し流されてしまっ

現代道路網の中の旧東海道

③　日坂宿出口より掛川宿東入口木戸（新町）まで

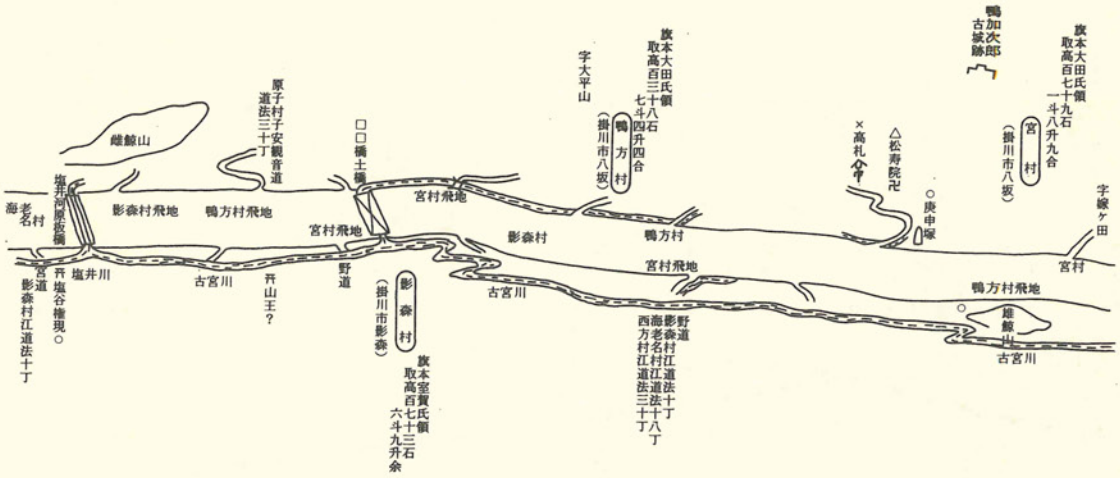


たということで大変残念である。またこの福天権現に通ずる、萩田理髪店の曲り角に現在でも福天権現の道標は建っている。寛永新道以前の古駅路の入口は、この福天権現の道と推定しているが、別項の「江戸期にあった寛永前の古駅路」を参照して載きたい。

萩田さんの前を通って再び国道一号線に交わるのであるが、途中左側に国鉄菊川駅に通ずる県道が走っている。その南東の角に「絵図」にない大頭龍神社への道標と、石燈篭および仮拝殿がある。さらに少し行った国道一号線への出口手前に、「絵図」の秋葉常夜灯があるが、並んでいる庚申塔はない。（しかし後で述べる岡本義郎氏宅前の、白子、子育観音地内にある庚申塔がそれであると思う。）常夜灯に並び「絵図」には無いけれど、歌人石川依平の出生地の碑が建っている。反対側に「慶雲寺道是より五丁」の道標が建っている。国道一号線を横断して、掛川農協東山口支所の脇道を北へ入ると、掛川バイパスの手前左に御堂がある。この小祠の中に文政三年の馬頭観音と如来さんと、観音様が並んで立っている。慶雲寺は今川家の家臣伊達縫之助の屋敷内に建立されたと言われ、門前には六地蔵、庚申塔、その他石仏が並び、霊園も経営してなかなか栄んな寺である。国道一号線に戻り、一号線と合流している東海道は再び別かれ左の県道へ入る。入口左側に諏訪明神（現諏訪神社）が、この地域の氏神として森の中に建っていた。

（別項「江戸期にあった寛永前の古駅路」を参照）

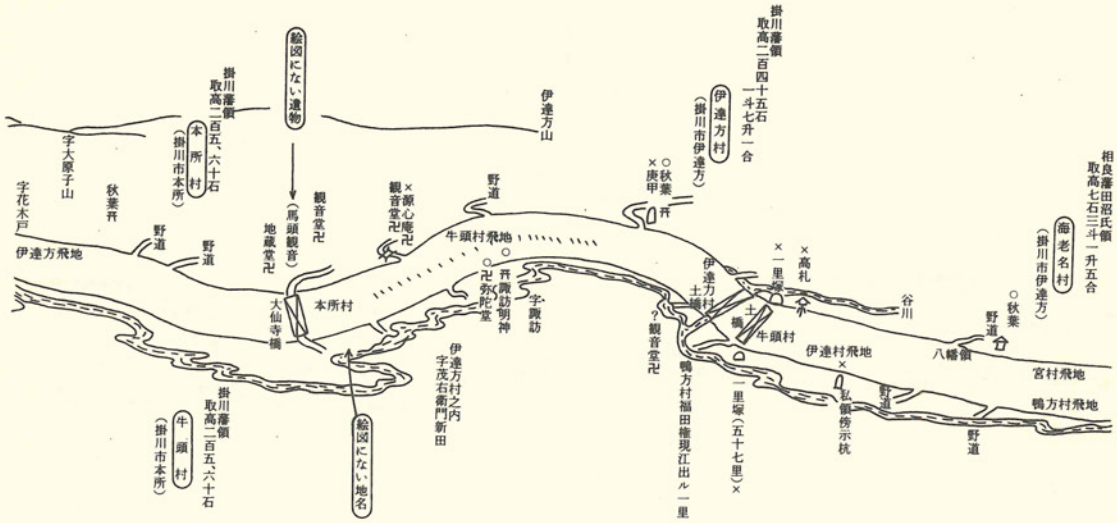
さらに百メートルほど進むと右手に小さい森がある。これが先程述べた「絵図」の地蔵堂の位置で岡本義郎氏宅の前に当る。この附近の人々は白子子育観音と呼び大変親しまれている観音様である。ここは落合家代々の墓所であり、数十の墓石がずらりと並んでおり、先ほどの白子子育観音と共に「絵図」にあるこの附近の遺物、地蔵堂、馬頭観音、庚申塔などが安置されていた。この庚申塔は、先ほどの石川依平出生地碑の隣り脇にあるべき



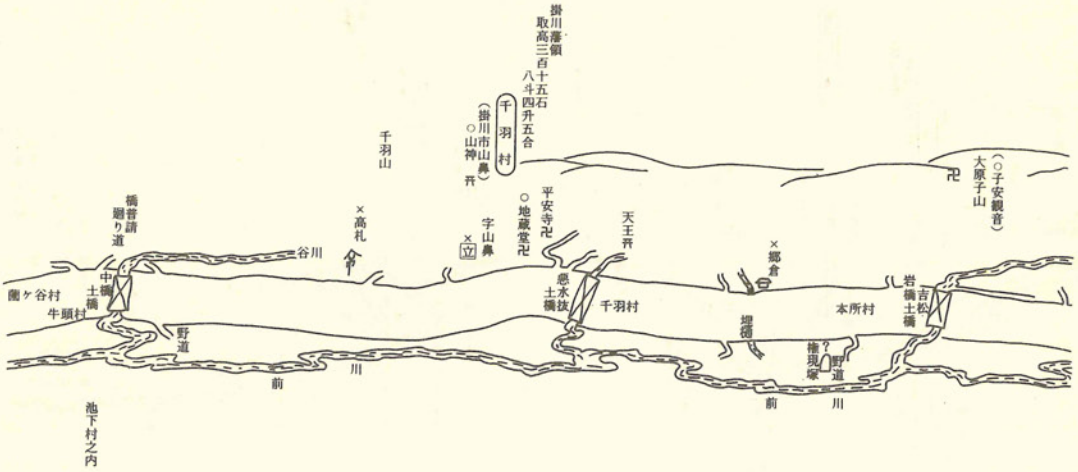
はずだったが、現在この地に移動されたものと思われる。）この伊達方の街道の昔は、元来牛頭村、伊達方村、本所村が変わっているのだが、現在は伊達方に統轄されている。本所村の吉松岩橋の北に大原子山がある。その麓には遠江国二十番札所の子安観音がある。毎年御開帳があるのだが、境内には日切子育観音や庚申塔などもあった。また、街道の南側榛葉鉄工所辺りに権現森が「絵図」にあるが、今回は未調査に終った。右側の郷倉は現在無いが、次の千羽村の地蔵堂は茶畑の中にあった。手前の天王社の位置には、村社潮乃神社があって、それと思われるが確認はできなかった。また字山鼻に立場茶屋が昔はあり、日坂宿より三十町、掛川宿へは三十五町と、ほぼ中間地点にあったのだが、現在その跡を示すものは何も残っていない。千羽村字山鼻を過ぎ薗ヶ谷村に入り、中橋を通ってその先の薗ヶ谷公民館附近に、昔は悪水抜土橋があった。そして右側に高札、郷倉があったのだが、勿論今は何もない。その先北側の新潟運輸を入った所に、神明、白山社が、現在は神明神社として、また白山、雷電権現合祀となっていた。薗ヶ谷、宮脇、成滝はもと一村で田地は混在していた。そして、この神明神社の西側が今の宮脇と呼ばれるようになったと言われている。

日輪山天養院は、城東郡西方村曹洞宗龍雲寺の末寺で、開山は龍雲寺四世祥山和尚という。もと西田の寺家というところにあったが、寛文年間（一六六一年―七三年）蘭山和尚の時に現在地に移ったのである。若宮天王は若一王子ともいって、長さ一尺六寸ばかりの薬師の木像があって、神仏習合による本地仏と称されているそうだが、行ってみるとその地点には山古神社があり、現在確認するに至っていない。

東海道は成滝の掛川スーパーマーケット宮脇店の前から再び分かれ、左側へと県道葛川下俣線に入って行く。昔はこのあたりは宮脇村と成滝村が混在していた。入口左側に「絵図」にない三面大臂の馬頭観音が小祠の中に立っている。少し行きヤマ



ハの会社前をはずれた所から南東に行く県道がある。この角に大日堂があったが現在は残っていない。この道が「掛川誌稿」にある寛永新道以前の古駅路（古東海道）であった。この古駅路は別項の「江戸期にあった寛永以前の古駅路」を参照して頂くとして、少し先に「絵図」にある諏訪明神が、現在成滝の氏神神明神社として残っていた。元の街道に戻り西に進み伊達医院の前から南に曲る道が、今の県道掛川浜岡線である。またその先掛川農協西山口支所の手前から南へ入る道がある。これが昔の川崎街道の入口で、以前にはこの脇道に道標（川崎港六里、大頭龍権現二里、福天権現一里）が建っていたが、現在伊達病院の横に倒れている。この道が先に述べた掛川浜岡線の西山口幼稚園の先、山口橋のところへ通ずる。この間に「絵図」の延命地蔵像と阿弥陀寺が現存しているのである。正覚山阿弥陀寺は浄土宗知恩院末で、開山は圓蓮社鏡誉上人（寛永十九年歿）である。境内にはさまざまな石仏、庚申、歴代住職墓などがある。川崎街道を元の東海道に戻り、成滝村の次は印内村（現在掛川市成滝）である。印内と次の馬喰村には高札場があったが、今はその場所も定かでない。印内村をはじめ次の馬喰村にしても、以前は成滝村であったものと思われるが「慶長五年（一六〇〇年）仁藤村に住む修験共印内の新屋敷に移す。」と「掛川誌稿」にあり、三代将軍家光公の正保二年（一六四五年）ごろに独立した村になったものである。印内村の次の馬喰村にあった「絵図」の光明院は「掛川誌稿」によれば、寛永検地の時、博労町常覚院屋敷八畝二歩の所令免許とあり、さらに寛永二十年の免状には福蔵院屋敷とあり、現在の福井肥料店あたりと思われる。またこの地所を持っていた興右衛門は虎を飼育していたとある。馬喰橋は現在の橋の上流で街道は交叉点手前あたりから左に曲り、川向うの葛川公会堂の敷地内を通り、入口あたりから現道路に復したと思われ、当然馬喰橋も現在の橋の上流に土橋として架かっており、長さは二十三間であったとい

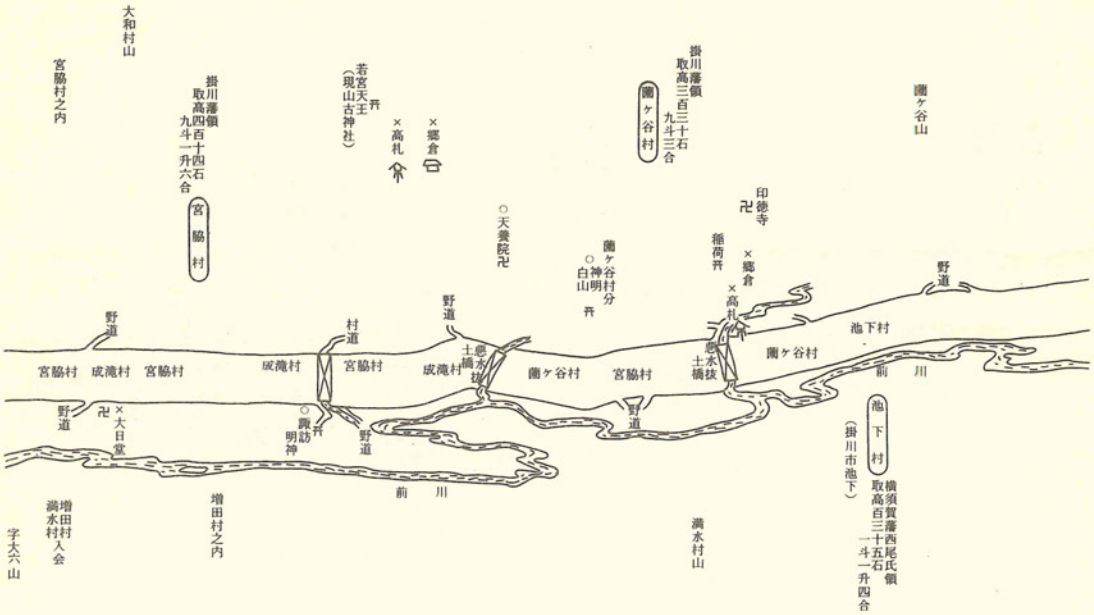


う。また当時は馬喰橋を渡ると増田村に入る。街道の両側三間ばかり入った所に五十八里の一里塚があった。月形で周囲は十五間（約八、三メートル）の小高い塚に、廻り六尺ほどの松の大樹であったが、明治初年に伐採され同時に塚も跡を留めていない。現在「絵図」には無いが、公会堂地内に「秋葉常夜灯」が一基ある。

増田村の街道沿いを「絵図」にある通り大賀町といった。慶長年中の山内一豊城主の時、大鋸職（木挽師）の者五人、郭内に住んでいたが、外郭を定めた時にこの地に移され年貢を免除された時に始まる。「掛川誌稿」には大鋸町とあり、またオオガ町と訓むとあるが後に美字として大賀町になったものであろう。寛永二十年九月仁藤村八幡宮の西に住んでいた博士、小大夫を、侍屋敷を建つため大鋸町に替地をあたえ、免状に大鋸四人分屋敷、博士、小大夫屋敷と二条に書き分けてある。また一方慶安寺の条に、城中のおはらいをする修験を廣安寺といい、もと延寿院と言ったが文化元年七月（一八〇四年）に廣安寺と改めた。そしてさらにその修験を博士、小大夫と言ったとある。「絵図」の延寿院不動堂は、この博士、小大夫が住んだ所であった。

延寿院の先にある秋葉常夜灯は、前にあった葛川公会堂地内に現存しているものか、新町郵便局前を南に入った所に有るものかのどちらかであろう。

次の道脇村は仁藤村に佛堂寺というお寺があったため、堂脇と呼ばれ、後には堂脇村と一村の名となった。この佛堂寺は、種々の古証文より推察するに、阿弥陀仏の念佛道場であったか、元和四、五年頃（一六一八―一九年）永江院より禅僧が移り隨雲寺と改めたが、現在六軒町に瑞雲寺跡地の墓地があるのみである。道脇を南北に横切る川は現在でも兼子酒店の横にあり、その先を左に折れて行く道が旧東海道であり、また掛川宿の内、新町宿の入口である。道は南に百メートルほど進み四叉路を西



に曲り、その先の角皆建具店の路地を右に入った所に東伝寺は現存していた。さらに百メートルほど進みぶつかった所が、県道の新町郵便局の前を入った南北の道と合流して街道は南へ進む。この合流地点の山本恵庸さんの前に秋葉常夜灯が一基ある。南へ進み角皆製茶の入口の前を右に折れ街道は西進するのであるが、じきに南へ出る道が「絵図」にある。杉谷へ出る道のり十三丁の野道の現在の道である。さらに百メートルほど行った左側に駐車場がある。ここが昔の塩問屋の跡地と言われている。そこから五十メートル程進むと道は右に折れ、掛川宿の東入口木戸の前に出るのだった。

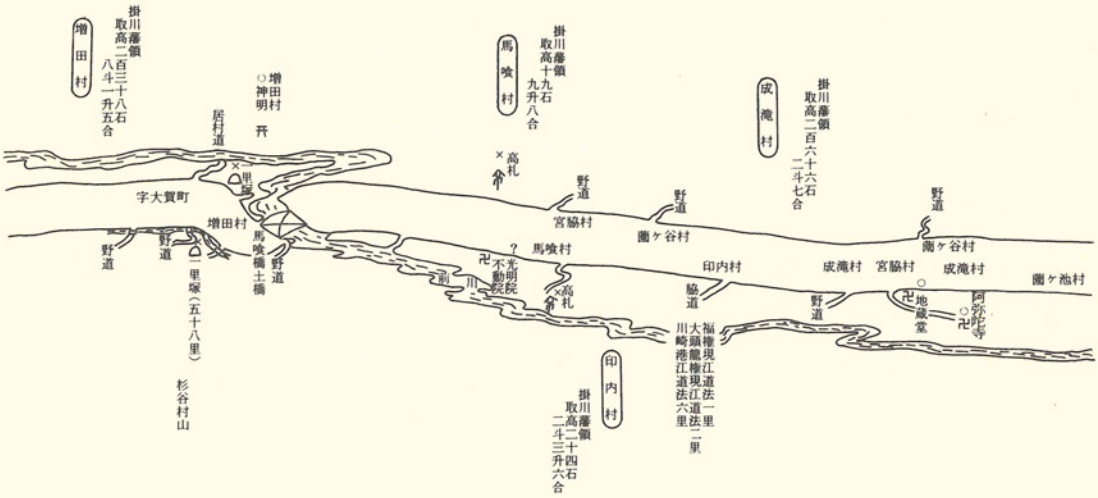
伝説嫁ヶ田、姑ヶ畑（または姑ヶ井）

掛川市日坂―昔この辺に嫁につらく当る意地悪な姑がいた。ある時嫁に、「きょう朝のうちに一反歩の田を植えよ。」と、きびしく言いつけた。温厚な嫁は一生懸命に植え始めたが、とても短時間に植え終ることができず、辛苦に堪えかね付近の石に腰打ち掛けたまま死んでしまった。この時からこの田を嫁ヶ田と呼ぶようになった。また姑は畑に出て仕事をしていた矢先俄かに雷が鳴り出したのに怖れおののき、避難せんと影森村の生家に入った時、頭上に落雷をうけて死んでしまった。これより姑が仕事をしていた畑を姑ヶ畑と呼ぶようになった。

（掛川市誌）

〈文献〉東海道名所記

掛川市（旧佐野郡影森村）―右のかたに銀杏の木あり。その右は田なり。よめが田と名づく。道より五町ばかり左のかたに、しうとが畑あり。これ、むかし、よめあたりのつらきしうとめあり、一畝の田を朝の間に、よめにうえさせしかば、石にこしかけてよめは死にけり。よめのこしかけ石、今にあり。塚につきて銀杏の木をしるしにうえたり。木も今道ばたにあり。しうとめは、畑に出て麻を見けるが、にわかに雷なりければ影森と



いう在所に逃げ入りて、終にいかづちにうたれて死ぬと申しつたえし。

〈類　話〉

①掛川―嫁の田、姑の畑（小笠郡誌）
②掛川―縁定めの石、嫁の田、姑の畑（孔版「掛川及び其の近郊の名所、旧跡、伝説を訪ねて」）
③榛原郡榛原町―嫁田（ふる里の伝説）
④清水市大内―嫁田（伝説昔話集）
⑤長野県北安曇郡松川村―嫁殺し田（北安曇郡郷土誌稿第一輯）
⑥長野市更府―嫁殺し池（日本伝説集）

伝説、雄鯨山、雌鯨山

日坂宿を出て、日坂八幡宮の西の左側に雄鯨山、塩井川原の手前右側に雌鯨山と昔から呼ばれている山がある。現在でもまだ碁石のような石が頂上附近に行くと出てくる。それについて次のような伝説がある。

孝徳天皇（六四五年）の頃、この地に福天権現のお宮があった。福天権現には美しい姫宮があった。ある日のこと福天権現は、日坂八幡宮と二人で囲碁を楽しんでいた。するとそこへ竜宮から、雄鯨、雌鯨の二頭が竜神の使者として、

「福天権現殿の姫宮を、是非とも申し受けたい。」

と所望して来た。

「何、わが姫を・・・」

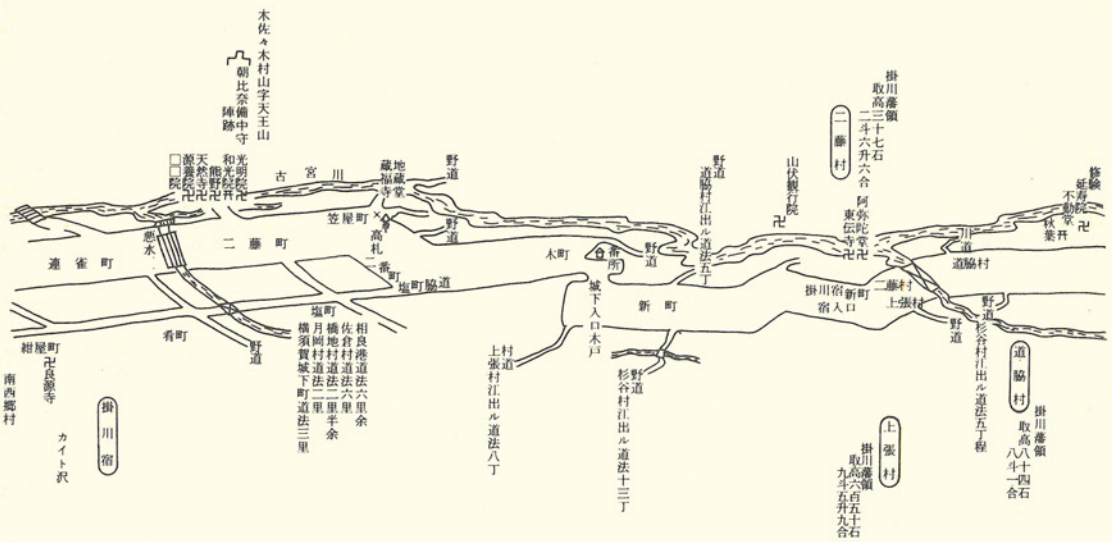
福天権現はびっくりした。それですぐ、部下の者に命じて、

「姫を隠せ、大沢に隠せ。」

と後の大沢に隠してから

「ならぬ、わが姫は竜宮へなど遠い所へ遣すことはならぬ。」

と大喝した。



「でもあろうが竜宮はこの世の楽土、是非ともお遣し下され。」

「ならぬ。」

「左様なこと申されると竜宮のお怒らによって、この地は大変なことになりますぞ。」

「竜王など何が恐れるものか、この地にはわれと日坂八幡がいるではないか。」

「それならば、われらにも考えがある。」

雄鯨と雌鯨は怒って、福天権現と日坂八幡を呑もうとした。

「何をッ。」

怒った福天権現が、手に持った碁石を雄鯨にたたきつけて殺すと、「よしッ。」

と日坂八幡宮も怒って、同じく碁石をたたきつけて雌鯨を打ち殺した。すると七日の間、この地は暗夜となってしまったので、このあたりを「くらみ村（倉真村）」というと。

福天権現は、その死んだ雄鯨を左側の山に、雌鯨を右側の山に埋めてやった。これでこの二つの山を「雄鯨山、雌鯨山」というのであると。

またその後、この二つの山からは、白と黒の全く碁石と同じような石が、数多く出るようになったとのことである。

（小笠郡地勢要覧による）

立場（立場茶屋、掛茶屋）

江戸時代から明治にわたって、宿場と宿場の中間地点や入口附近にあって、荷駄、駕籠の受付や中継所、旅人の休息所、湯茶をはじめ一膳飯、そしてその土地の名物の餅や、ダンゴ、いも、わらじ等を商ったりした。立場の様式は街道から軒場に馬をおき、奥に縁台を置いて人々が休んだ。さらに人足や駕籠かきのたまり場であり、彼等はここを基地として仕事の準備や休憩をしたりしていた。馬を立てたり、腰を掛けたりした仕事により立場茶屋とも、掛茶屋とも呼ばれたのである。

瞽女橋土橋と広重、弥次喜多で有名な塩井川の渡し風景

「絵図」に□□橋と書かれている橋がある。□□とあるのに興味をもったのである。前に原泉小学校の石野武文校長に聞いた。昔この附近に「瞽女橋」があり、街道南側の汐井川原附近には瞽女がたくさん住んでいたということと、また一方静岡県文化財調査報告の、日坂宿の古宮橋が瞽女橋とあり、妙に気を引かれるままに調べてみると、やはり「ドライブイン静岡」の西隣りにある小川の街道に架かる橋が、瞽女橋と呼ばれていることがわかった。

瞽女の歴史は室町末期から桃山時代に始まるとされている。盲目の女で三味線等をよく弾き、小唄、踊りなどを披露して生活をしていた。そしてその大半は、公家や諸候の屋敷に抱えられていて、一般大衆とは無縁の存在の遊芸人であった。

江戸時代に入ると、一部上級のものは相変らず大名の奥方などに招かれていたかも知れないが、大部分の者は、大名、公家から離れて道中奉行所の配下になった。

そして城内や、屋敷内にいた遊芸人たちは、奉行所の支配は受けていたが、自由遊芸人として囲いの中から開放された。つまり自分たちの意志で芸を売り生活する。移動集団の旅芸人の誕生が、ここから始まったと言えるのである。

しかしながら旅芸人たちは、自ら求めて大衆の中に入ったと言うより、道中奉行の上役人からの密命を受け、宿場から宿場と渡り歩きながら、芸を本陣や脇本陣で披露し、そこに宿泊している公家とか外様大名の動きをさぐり、遂一、奉行所に報告する義務を負っていたのである。つまり幕府の最先端の情報収集のスパイ団だったのである。

そのためには、各地の宿場町の外れには、必ず瞽女屋敷があり、彼女たちは道中奉行を通じて屋敷とか、ご扶持米等の給与を受け、生活が保証されていたのである。

この　女が独立して集団化したのは、享保（一七一六―三六年）年間以降だと言われている。このようにして外様大名や公家たちは、常に幕府のスパイ網に囲まれ、温なしく幕府体制に従わざるを得なかったのである。

瞽女橋の先、八坂歩道橋の手前を南に入った八坂橋を渡り、影森の左側山上には「絵図」の山王がある。現在この地区の氏神さまで日吉神社となっていた。道脇に秋葉常夜灯がぽつんと立っていた。

「絵図」の塩井河原板橋は、八坂歩道橋に位置しており、江戸期においては古宮川がこの附近で塩井川と呼ばれていた。

天保四年（一八三三年）の安藤広重の出世作である「保永堂版東海道五十三次続絵」に「掛川宿、塩井川の橋土風景」として描かれている。またこの橋は弥次喜多の両人が、京上りの座頭（盲人）二人を、盲であることをよいことにして、さんざんたぶらかした報いであげくの果てに川に落ち、大変な目にあったことが「東海道五十三次、膝栗毛」に書かれている。

江戸期にあった寛永前の古駅路

「掛川誌稿」成滝村の項にある「寛永年新道」について次のように記されている。

一、「寛永三、四年の項、朝倉家掛川城主の時、駅路を易えられしことあり、古駅路は成滝村の大日堂の西より南へ出て、池下村、牛頭村をへて本所村に至る、今も大なる古道あり、是は川瀬漸く易り、僅かの間に橋二ヶ所ありてしばしば人工を費せし故、その流れを避けて今の駅路を開きしものならん。」

二、また池下村の項に「池下村は鞍橋池の下にある故に名を受く古駅路なり、古は民戸軒を並べて坊をなせしにや、慶長九年検地帳にも池下町としるせり、源光行が街道記に（貞応二年）山口という今宿を過れば、道は舊によって通ぜり、野原を跡とし、里村を先にして折かえに過行かば、事の任と申す社（牛頭村諏訪明神と思われる）に参詣す。この池下町を以て今宿と云

しなるべし」

三、さらにまた牛頭村の項に「牛頭天王は即ち、牛頭村の祭る所なり、今駅路にある小祠は諏訪明神と合殿たり、駅路の本所村の南にあたりて天王森あり、その傍に馬場の跡あり天王社の舊跡という、その東北に古河の跡あり、今は瀬も替りしがいつのことか、その河水社地に逼りし故に今の諏訪明神の所に移せしと云、此の諏訪祠は駅路にありて日坂にも近き所なれば、自ら旅客の目にもふれ易く事任社はここなるべしと云う説なすもの往々あり、されどこの諏訪祠も古くよりここにありしと云う証もなし、天王祠とともに移りしものなるもしらず、もとより取り足らざるなり。・・・・また諏訪明神の祠中に巨大の陽石あり、是はもと大井川より出たるものという。大井川の一源、信州より出ずれば後人此の石により諏訪祠を建てしものにやあらん。」

四、なお、堀越入道某の墓の条に「堀越入道の墓は、庄屋山崎彦衛門が門前にあり、古へは五輪塔なりしがいつか石地蔵を造りて古色を失ひき、池を鞍壷と云ひ、坂を鞍壷と云ふ、皆古駅路なり、堀越入道その名を傳えず。」とある。

以上寛永新道以前の古い道筋が「掛川誌稿」の各項目の中にあって、概略推測してみると、先ず東からの古駅路の入口を八坂歩道橋の先国道一号線から左へ県道（旧東海道）に入り、萩田理髪店と鈴木計夫氏宅の福天権現の道を左折し、一里塚跡地を左に見て川を渡り、杉山広一さんや村松静雄さんの南側の道に出る。西進して県道菊川停車場伊達方線を横切って、元掛川市長鈴木理一郎氏（現戸主克巳氏）宅から清水橋を等り、河本純一さんの牛舎の所に出る。何度も川を渡ることに疑念を生ずるのであるが、現在の伊達方附近は随分川筋が変っておるので相当な調査を必要とするが、今回は「掛川誌稿」と諸先輩の話から推察するのみである。

牛舎から鶏舎へと、河本敏郎さん前を南西進して右に河原丁の地名を見て、路は川の近くで途切れるけれど、つい最近まであったという可美橋があり、現在は草ぼうぼうであるけれど対岸の渡辺俊郎さんの横へ出る。西隣りはこの近辺随一の旧家の本家渡辺はなさんの屋敷があり、門前には県指定文化財「伊達方の大ヒイラギ」が今も重厚に立っている。古駅路はすぐ県道に出るが、この県道に沿って駅路は右に左に西進するのである。伊達方新田から牛頭を通り、前述の「掛川誌稿」四の項にある庄屋山崎彦衛門屋敷（現戸主山崎忠彦氏）あたりは、右側の低地をたどり逆川に近い低地を山崎屋敷の下より南西進するのであるが、昔の路は今と違い相当な急坂で鞍壷坂と呼ばれ、屋敷の東横を門前へとのぼるのであるが、現在は県道でたち切られ門前から離れていて、堀越入道の遺跡の場所は山崎志津男さんの門前になっている。堂の中には地蔵さんと庚申さまが安置してあり、南上には秋葉常夜灯が立っている。古駅路は細い道を公会堂の前を西進して、また県道の位置に坂を下るのである。やがて鞍橋池（現在名鞍骨の池）に出る。「掛川誌稿」鞍橋の池の項の「此の池の北にあるを池下町など呼べるを以って思えば」にあるように、古駅路は池の北側を通り、その先若宮天王（若宮八幡）の二差路を左手にとり西進する。やがてヤマハツの会社を左に見、さらにその先右手に神明神社（もと諏訪明神か）の参道の前を通り、「掛川誌稿」にいう大日堂（現在なし）の所で旧東海道と古駅路は合流する。

地蔵信仰について

㈠由来　釈尊が入滅してから五十六億七千万年の先に、弥勒菩薩が人間世界に出現するまでの間は、無仏の時代とされている。この無仏時代に地蔵菩薩が釈尊の付属を受けて「六道を能化」する菩薩として人間世界に出現して、五濁の世界を教済してくれるとされ、末法思想が普及するにしたがい、地蔵盆、地蔵講などできて地蔵信仰が急速に広まった。地蔵の地は、万物を生

む大地のことで、蔵は諸宝を蔵する意味からこの名があり、忍耐強く動かざること大地のごとく落ち着いていられるという。

㈡地蔵尊信仰　地蔵尊が一尊独立として、一般に信仰されるようになったのは、約三百年前に唐の永徽四年、阿地くぜ三蔵が「陀羅尼経」に初めて地蔵の名を出してから、中国では非常な勢で信仰が流行した。

日本での地蔵信仰は、釈尊の滅後弥勒（ミロク）菩薩がこの世に出現するまで、この世に法を説き衆生を教済する仏がいないため、地蔵菩薩が修業僧の形でこの世に現われて、六道の衆生を救うように付属された菩薩であるとされて、平安時代の後期の頃から阿弥陀の地獄、極楽信仰と結びつき、冥土（メイド）（死者の世界）で死者の苦しみを地蔵菩薩が救ってくれるものとして、初めは貴族の間で信仰が盛んであったが、後に民間の人々にも信仰が浸透して、日本固有の道租信仰とも結びついて、村境いや町の辻に地蔵尊を建てて信仰されるに至った。

また地蔵尊が他人の犠牲（身代り地蔵）となって、人々の難儀を救ってくれる信仰が起きたのは、京都で悪病が流行し多くの人々が病に苦しめられていた時、慈覚（ジカク）大師が地蔵尊の影像を木版に彫り、これを印刷して河に流したところ、防疫の効果が大いにあったとして、京都の各町内に地蔵尊像が祀られたという。現在も千枚の地蔵流しと称してこの行事が伝わっている。

一尊（イッソン）独立した石の地蔵尊は、多くは地蔵袈裟（ケサ）を着け、左手に錫杖（シャクジョウ）を持ち、右手に宝珠を持っていて、地蔵信仰は阿弥陀、観音信仰と共に、現在でも民間で広く信仰されている。とくに子どもを失った親たちが、冥土の賽の河原と称する所で、死んだ幼い児が地蔵の法衣の袖にかくまわれて、鬼を防いでくれると信じて、子どもの冥福を祈る母親たちが地蔵和讃を唱えたり、また幼くて死んだ子どもの供養のため、地蔵尊を建立する風習が伝わっている。さらに妊婦が安産を祈願して信仰するなど、庶民の間で親しまれている菩薩である。

㈢種類　(1)六地蔵―地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道、の六道に配されて、六地蔵として江戸時代では、六地蔵尊を町の入口や街道筋に建てて、信仰をすることが大変流行した。現在でも町角で見られるが、道路整備によりお寺などに移動しているものが多い。

(2)その他種類は多いが基本的には身代り地蔵、病気祈願願掛け、安全祈願、子どもの子守り、子育て、水子延命、勝軍（戦に勝つ）の各地蔵で、民間の信仰の対象として生まれた地蔵の名前は、人々の心情を表わした数限りない名の地蔵がある。

徳川政権の確立

徳川政権の基礎が確立したのは三代将軍家光の時代（一六二三年七月）に入ってからである。世界史の上でも、これほど完全な封建支配体制はなかったと言われ、その特質をあげると、

一、親藩、譜代、外様の各大名の巧妙な配置

一、天領（幕領）を巧みに分布して代官を置き、常に諸大名を監視させた。

一、権力の座の大名（譜代）と、経済力の座の大名（外様）とを普立させ、両方の力を持つ大名をつくらなかった。参勤交代制の実施や、土木事業を命じて金持大名を作らなかった。

一、庶民には五人組制を強制して、反逆的行為を封じた。

城と宿場の防備及治安対策

戦国末期から江戸時代、宿場の中心に城がある掛川城及宿場は、防備と治安が大変厳しかった。掛川の場合も防衛上、大体一直線に走る東海道が、城下に入る新町附近から急に鍵の手のように左に曲り、右に曲り、さらに右、左と、七曲りの屈折の迷路となっていた。数千、数万の敵兵が一気に攻め込んで来た場合でも、この迷路により混乱を起させ、地形に通じた城兵に

より打破るとか、とにかく攻め難くさせたのである。これを「絵図」により推定すると、県道から小笠原タバコ店と鈴木辰男さんの間を左に折れて、司建設の十字路を右に、石川米穀店を左に、さらに角替製茶の入口の所を右に曲り、田宮建司さんの所へぶつかるとまた右に折れ、再び県道に出るという複雑さである。

一方治安対策と旅人の取締り及物資流出の監視のため、林写真館と中根茶店の手前あたりに、両側から石垣や竹の柵でさえぎり、中央部に大きな門を構えたものも推測される。門の真正面の塩沢機械店の倉庫辺りに、東町口番所があり、役人が交代で物資の出入りを見張ったり、旅人の出入りを厳重に監視したのである。

昭和三年四月、喜町より西山口村葛川に至る道路を、区民の同意により直線に変更したとされているが、実際は林写真館の話によると、「新道建設に反対した新町の人たちは、竹槍を持って役所に押しかけ、大変な騒ぎであった。」と言う。

（未完）

次回「掛川宿及掛川宿西出口木戸より原川町まで」

あとがき

掛川市地内の旧東海道の現在はどのようになっているか、次から次へと整備されて行く新道により、旧道は随所で寸断され、ある個所は拡幅されて新道の一部となり、ある個所は間道となって集落の生活道または農道として残ってはいる。しかし、道路行政の進展に伴い、やがては廃道となり、草にうずもれると思われる個所も散見される。私たち郷土史研究会としては、この忘れ去られて行くものを今記録に留めて、後世の人々に言い伝え分かりやすくしておく義務があると思う。

金谷駅より原川までの旧東海道を「東海道分間延絵図」の道順に従って尋ね歩き、遺跡、遺物の所在を確め、街道にまつわる歴史と民俗の伝承を思い、さまざまな想念、また私たちが学びつつあるものをそのまま書き留めて行ったのであるが、誠に時間的制限と資料不足、浅学管見から不満足のものとなってしまった。しかしこれはほんの骨組であって、今後数年調査を継続して補訂することにより充実させたいと思う。

今回は掛川宿東入口木戸までで終りましたが、掛川宿より原川の区間については、「ふる里掛川」に継続して行ければと思っております。

歴史の真実を探求するための地方史の立場としては、次の事を重点として調査して行きたいと思います。

一、神社の原初祭神の追求及其の後祭神を変更した理由
一、廃寺の調査
一、遺跡、遺物の年代別調査
一、地名の発生起因
一、古道の通過地点と遺跡、遺物の分布状況
一、民俗遺産、及民俗伝承にまつわる民俗の精神構造

参考資料

東海道分間延絵図、歴史の道調査報告書、掛川誌稿、静岡県史、小笠郡誌、掛川市資料集近世編㈡、静岡県郷土研究、地方史研究、遠江風土記伝、巌ヶ根雑誌、日本歴史大辞典、歴史散歩辞典、静岡新聞「いま街道は」、ふる里の街道、仏像をたずねて、遠州の野仏を追って、講座日本の民族宗教、ふる里百話静岡県の歴史散歩、信長公記、探訪神々の古里、日本民族学入門、一豊公紀、被差別部落の歴史、日本伝説大系、遠州伝説集写真集掛川、図録掛川城、住宅地図（掛川市、金谷町）